

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第198集

千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成4年度に発掘調査した千手堂・羽黒山麓Ⅰ・羽黒山麓Ⅱの3遺跡の調査結果をまとめたものであります。これらの3遺跡は和賀川右岸の河岸段丘上に立地し、調査の結果、千手堂遺跡からは時期不明の溝跡、羽黒山麓Ⅰ遺跡からは時期不明の炭焼窯跡、羽黒山麓Ⅱ遺跡からは縄文時代の土坑が発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例 言

- 1 本報告書は岩手県北上市和賀町山口地区に所在する^{せんじゆどう}千手堂・^{はぐろさんろく}羽黒山麓Ⅰ・^{はぐろさんろく}羽黒山麓Ⅱの3遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。

	遺跡番号	遺跡調査略号
千手堂遺跡	ME63-0055	S J-92
羽黒山麓Ⅰ遺跡	ME63-0052	HGⅠ-92
羽黒山麓Ⅱ遺跡	ME63-0073	HGⅡ-92

- 4 発掘調査期間、発掘調査面積は次のとおりである。

	発掘調査期間	発掘調査面積
千手堂遺跡	平成4年4月15日～7月31日	6,900㎡
羽黒山麓Ⅰ遺跡	平成4年9月21日～10月30日	3,900㎡
羽黒山麓Ⅱ遺跡	平成4年8月3日～10月9日	4,300㎡

- 5 発掘調査は、千手堂遺跡、羽黒山麓Ⅱ遺跡を佐々木信一、新倉信一郎、羽黒山麓Ⅰ遺跡を伊東格、佐々木信一、小山内透、新倉信一郎が担当した。
- 6 室内整理は佐々木信一、新倉信一郎が担当し、報告書の執筆は佐々木信一が行った。
- 7 石質鑑定は佐藤二郎氏（長内水源工業）に依頼した。
- 8 野外調査にあたっては、北上市教育委員会及び地元の方々の御協力をいただいた。
- 9 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序
例言

本文

I 調査に至る経過	1	V 羽黒山麓Ⅰ遺跡	25
II 遺跡の立地と環境	1	1 遺跡の位置と立地	27
1 遺跡の位置	1	2 遺跡の土層	27
2 遺跡の立地と周辺の地形	1	3 検出された遺構と出土遺物	29
3 周辺の遺跡	7	[1] 検出された遺構	29
III 野外調査と整理の方法	11	[2] 出土遺物	29
1 野外調査	11	4 まとめ	32
2 室内整理	12	VI 羽黒山麓Ⅱ遺跡	33
IV 千手堂遺跡	13	1 遺跡の位置と立地	35
1 遺跡の位置と立地	15	2 遺跡の土層	35
2 遺跡の土層	15	3 検出された遺構と出土遺物	37
3 検出された遺構と出土遺物	18	[1] 検出された遺構	37
[1] 検出された遺構	18	[2] 出土遺物	43
[2] 出土遺物	18	4 まとめ	51
4 まとめ	23		

表

第1表 周辺の遺跡	8
第2表 千手堂遺跡出土石器一覧表	20
第3表 羽黒山麓Ⅰ遺跡出土石器一覧表	31
第4表 羽黒山麓Ⅱ遺跡出土石器一覧表	50

図 版

<p>第1図 和賀川下流域の地形…………… 3</p> <p>第2図 遺跡周辺の地形図…………… 5</p> <p>第3図 周辺の遺跡位置図…………… 9</p> <p>第4図 スクリントーン凡例……………12</p> <p>第5図 土層断面図……………16</p> <p>第6図 千手堂遺跡遺構配置図……………17</p> <p>第7図 溝跡……………19</p> <p>第8図 出土遺物(1)……………21</p> <p>第9図 出土遺物(2)……………22</p> <p>第10図 土層断面図……………27</p> <p>第11図 羽黒山麓Ⅰ遺跡遺構配置図…28</p> <p>第12図 炭焼窯跡……………30</p> <p>第13図 出土遺物……………31</p>	<p>第14図 土層断面図……………35</p> <p>第15図 羽黒山麓Ⅱ遺跡遺構配置図…36</p> <p>第16図 AⅠd2・AⅠe5・ AⅠf6土坑……………40</p> <p>第17図 BⅢc3・BⅢc5①・②土坑 出土遺物……………41</p> <p>第18図 柱穴状土坑群……………42</p> <p>第19図 出土遺物(1)……………45</p> <p>第20図 出土遺物(2)……………46</p> <p>第21図 出土遺物(3)……………48</p> <p>第22図 出土遺物(4)……………49</p> <p>第23図 出土遺物(5)……………50</p>
--	---

写真図版

<p>図版1 千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡 全景……………55</p> <p>図版2 千手堂遺跡遠景・近景……………56</p> <p>図版3 千手堂遺跡近景……………57</p> <p>図版4 千手堂遺跡基本土層……………58</p> <p>図版5 溝跡・作業風景……………59</p> <p>図版6 出土遺物(1)……………60</p> <p>図版7 出土遺物(2)……………61</p> <p>図版8 羽黒山麓Ⅰ遺跡近景・ 基本土層……………62</p> <p>図版9 炭焼窯跡……………63</p>	<p>図版10 炭焼窯跡・出土遺物……………64</p> <p>図版11 羽黒山麓Ⅱ遺跡近景・ 基本土層……………65</p> <p>図版12 AⅠd2・AⅠe5・AⅠf6・ BⅢc3土坑……………66</p> <p>図版13 BⅢc5①・②土坑、 柱穴状土坑群……………67</p> <p>図版14 出土遺物(1)……………68</p> <p>図版15 出土遺物(2)……………69</p> <p>図版16 出土遺物(3)……………70</p>
--	---

I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・第10次施行命令区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行ってきたが、日本道路公団仙台建設局からの分布調査結果の照会に対して昭和62年5月に回答している。それに基づいた両者の協議の結果、やむを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

昭和63年以降、岩手県教育委員会が日本道路公団仙台建設局に発掘調査事業について照会して回答を得たのち、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会、(財)岩手県文化振興事業団の3者の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとした。

千手堂・羽黒山麓Ⅰ・羽黒山麓Ⅱの3遺跡の調査は、(財)岩手県文化振興事業団が平成4年度埋蔵文化財調査事業の通知を平成4年2月12日付け教文第910号で岩手県教育委員会から受け、4月1日付けの委託契約によって発掘調査に着手した。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

千手堂・羽黒山麓Ⅰ・羽黒山麓Ⅱの3遺跡は岩手県北上市にあり、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.8kmに位置する。地形図上では、国土地理院発行の5万分の1地形図「川尻」NJ-54-20-1(新庄1号)の図幅に含まれ、北緯39度17～18分、東経140度58～59分の間に位置する。所在地番は、北上市和賀町山口38地割2-8ほかである。

2 遺跡の立地と周辺の地形

北上市は、盛岡の南方約64km、岩手県南部の西側にあり、北に花巻市、西に沢内村・湯田町、南に江刺市・胆沢町・金ヶ崎町、東に東和町が隣接している。

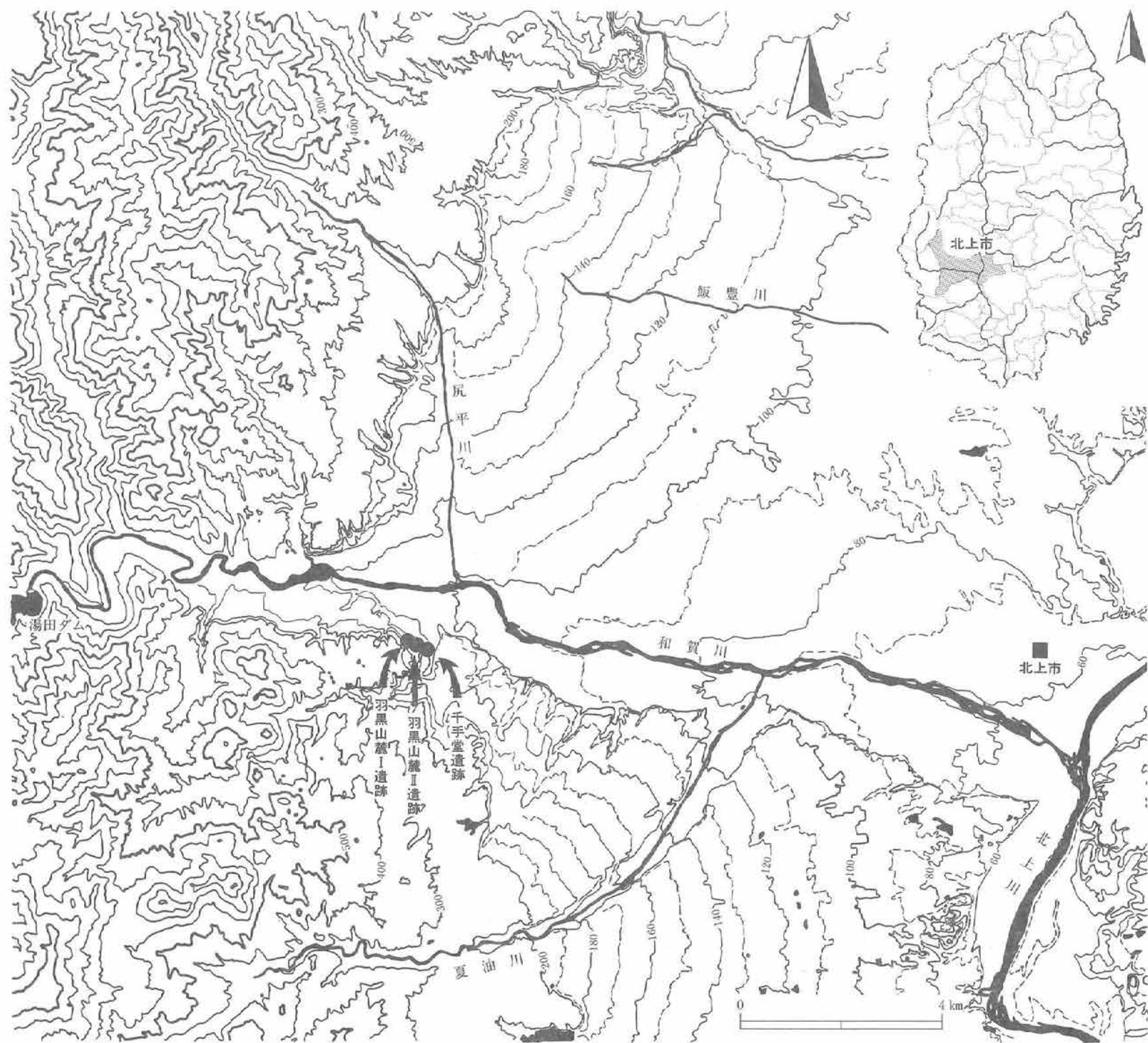
主要交通路は、東北本線、東北新幹線、国道4号、東北縦貫自動車道が南北に縦断し、秋田県と岩手県を結ぶ東日本旅客鉄道北上線、国道107号が東西に横断している。

北上市は、岩手県で最も広い平野である北上盆地のほぼ中央に位置し、東側は古生代、中生

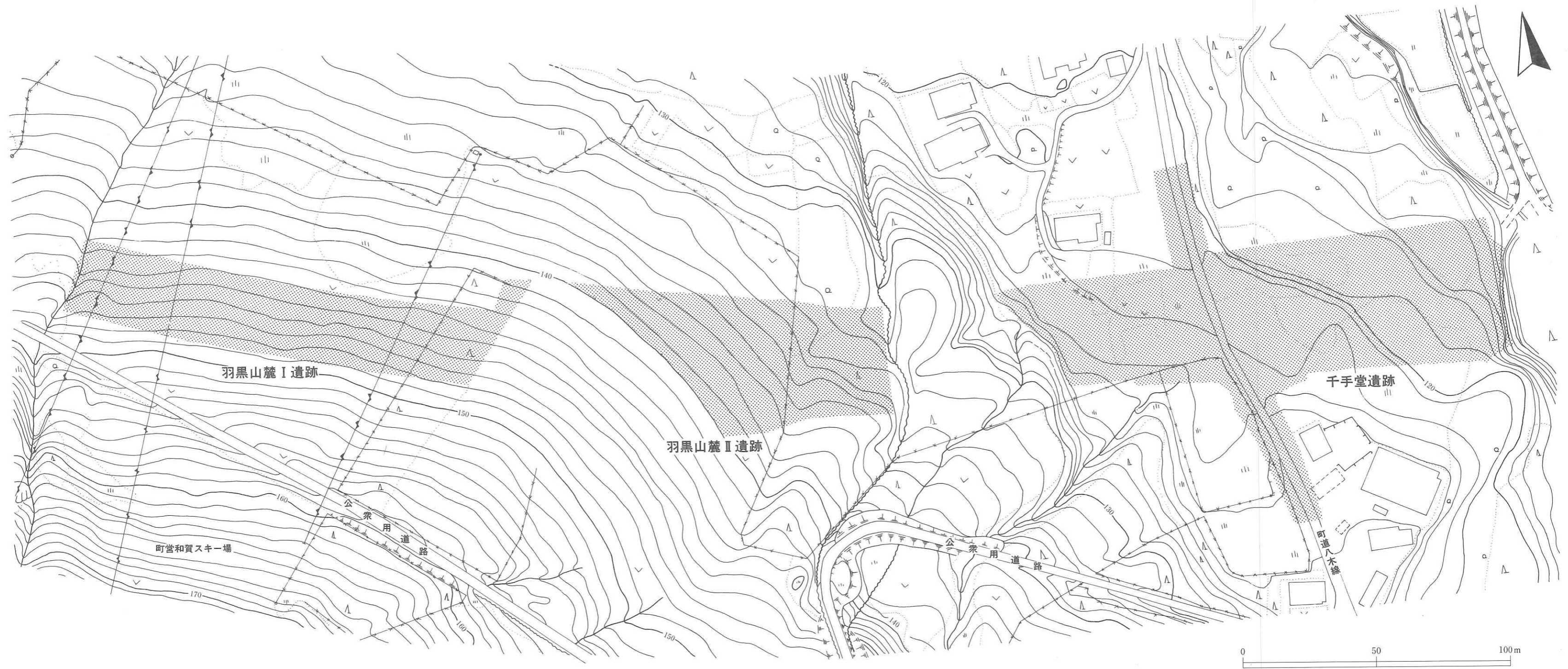
代の岩石が分布する北上山地、西側には新生代になってから形成された奥羽山脈が南北に連なる。市の東側を北上川が南流し、西方から和賀川が東流して黒沢尻町の南東で北上川へ合流する。盆地西端部には、急激に成長した奥羽山脈側からの河川によって大量の土砂が供給され、多くの扇状地が形成されている。

北上市はそれらの扇状地が開析されてできた段丘上に広がっている。そちらの段丘は高位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類されており、西根段丘はほとんどは奥羽山脈と北上山地の山麓部に分布している。村崎野段丘は花巻市飯豊・中笹間、北上市村崎野・相去・煤孫に分布し、村崎野浮石を含む火山灰が覆っている。金ヶ崎段丘は扇状地状の地形面のほとんどを占め、後藤野、岩崎新田に広がる地形面がそれである。この段丘が北上市付近では最も広く分布している。河岸平野は北上川、和賀川とそれらの支流に沿って分布し、表面には旧河道の跡が網目状に残っており、自然堤防である微高地上には住居が並んでいる。特に和賀川南岸の段丘は明瞭な崖（比高20～30m）に区切られており、東北横断自動車道はこの段丘上を走ることになる。

本報告3遺跡の所在する山口地区は低位段丘と河岸平野とから成り立っており、千手堂遺跡は河岸平野に、羽黒山麓Ⅰ・羽黒山麓Ⅱの2遺跡は低位段丘上に位置している。



第1図 和賀川下流域の地形



第2図 遺跡周辺の地形図

3 周辺の遺跡

北上市には現在約340ヵ所の遺跡が登載されている（岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳による）。和賀川を中心として遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部及び開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められる。

調査された主な遺跡としては、鳩岡崎遺跡（縄文・奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器）、新平遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、藤沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、溝状遺構、縄文土器）、九年橋遺跡（竪穴住居跡、土坑、縄文晩期の土器）等が上げられる。また、低位段丘上や河岸低地上に形成された自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布する傾向が認められる。調査された主な遺跡としては、下谷地遺跡（縄文土器、土師器、須恵器）、長沼古墳群、五条丸古墳群、猫谷地古墳群等があげられる。

和賀川右岸では丘陵の縁辺や中～低位段丘及び開析された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧水や深く入り込んだ沢、急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の2次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほか、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡（土坑、縄文土器、弥生土器）、岩崎城跡（土塁、溝、掘立柱建物跡、中近世陶器）、岩崎城跡の西半分にあたる梅ノ木遺跡（縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器）、成沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土師器）等があげられる。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡（旧石器、縄文土器、土師器）、上大谷遺跡（平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器）等があげられる。

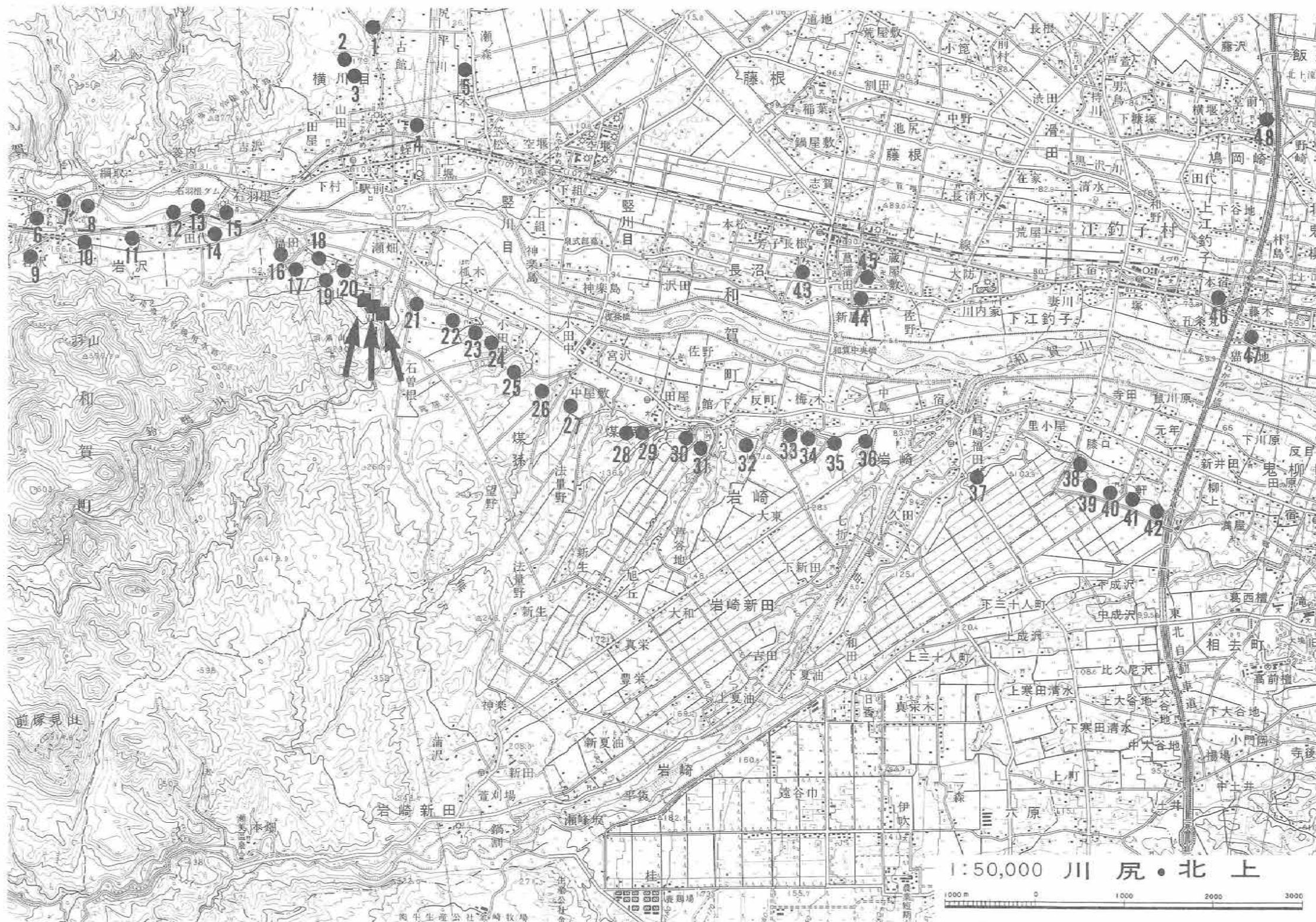
また、平成元年度から4年度にかけて、東北横断自動車道秋田線建設に関連して和賀川南岸の低位段丘上に立地する25ヵ所の遺跡が調査されている。調査の結果、羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡、千手堂遺跡（いずれも本報告遺跡）、田中館跡（土坑、縄文土器、土師器）、八幡野Ⅱ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器）、八幡館跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土師器）、月館跡（堀跡、柵列状遺構、陥し穴状遺構、縄文土器）、石曾根遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、本郷遺跡（縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、林崎館遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器）、中屋敷遺跡（弥生時代のフラスコ状土坑、土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土遺構、弥生土器）、法量野Ⅰ遺跡（土坑、陥し穴状遺構、溝跡、焼土遺構、縄文土器）、煤孫遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器）、観音館跡（陥し穴状遺構、平安時代の竪穴住居跡、平安時代の窯跡、中世の竪穴住居跡、中世の館に伴う堀跡、時期不明の掘立柱建物跡、縄文土器、土師器、須恵器、硯、陶磁器）、上反

町遺跡（堀跡、陥し穴状遺構、縄文土器、弥生土器）、兵庫館跡（平安時代の竪穴住居跡、中世の館に伴う堀跡・土塁・柵列・門跡、弥生時代の埋設土器・墓壇、時期不明の土坑、掘立柱建物跡）、梅ノ木台地Ⅱ遺跡（弥生時代の埋設土器、弥生土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器）、梅ノ木台地遺跡（陥し穴状遺構、焼土遺構、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）、岩崎城西遺跡（溝跡、柱穴列、縄文土器、土師器、須恵器）、岩崎台地遺跡群（平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器）、上鬼柳Ⅰ遺跡（陥し穴状遺構、弥生時代の竪穴住居跡、平安時代の火葬墓、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）、上鬼柳Ⅱ遺跡（弥生・平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、焼土遺構、溝跡）、上鬼柳Ⅲ遺跡（縄文・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、周溝、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器）、上鬼柳Ⅳ遺跡（土坑、陥し穴状遺構、平安時代の竪穴住居跡・畑跡、縄文土器、弥生土器、土師器）、柳上遺跡（縄文・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文土器、土師器）の遺構、遺物が発見されている。

本報告3遺跡の所在する山口地区には、他に田代遺跡（集落跡、縄文土器、石器）、小吹野遺跡（散布地、縄文土器、石器）、新田真平遺跡（弥生土器）、福田塚遺跡（塚）、馬場館跡（中世の館跡）、福田遺跡（散布地、縄文土器、石器）がある。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	古 館	17	新 田 真 平	33	兵 庫 館
2	蟹 沢 館	18	福 田 塚	34	梅ノ木台地Ⅱ
3	館 森	19	馬 場 館	35	梅ノ木台地Ⅰ
4	瀬ノ森墳墓群	20	福 田 館	36	岩 崎 城 西
5	蛭 川 館	21	田 中 館	37	岩崎台地遺跡群
6	岩 沢 Ⅰ	22	八 幡 野 Ⅱ	38	上 鬼 柳 Ⅰ
7	下 岩 沢 Ⅰ	23	八 幡 館	39	上 鬼 柳 Ⅱ
8	岩 沢 Ⅱ	24	槻 館	40	上 鬼 柳 Ⅲ
9	岩 沢 Ⅲ	25	石 曾 根	41	上 鬼 柳 Ⅳ
10	上 山 田 塚	26	本 郷	42	柳 上
11	下 仙 人	27	林 崎 館	43	長 沼 古 墳 群
12	下 仙 人 館	28	中 屋 敷	44	念 仏 車
13	御 前 淵	29	法 量 野 Ⅰ	45	蔵 屋 敷
14	泉	30	煤 孫	46	本 宿
15	田 代	31	観 音 館	47	猫 谷 地 古 墳 群
16	小 吹 野	32	上 反 町	48	鳩 岡 崎



第3図 周辺の遺跡位置図

Ⅲ 野外調査と整理の方法

1 野外調査

(1) グリッドの設定

千手堂遺跡、羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡とも、基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。各遺跡の基準点の成果値、グリッドの設定は次のとおりである。

千手堂遺跡

調査区域の高位面、中位面、低位面にそれぞれ基準点1～3を設定した。基準点の成果値は次のとおりである。

基準点1 $X = -78,760.000\text{m}$ $Y = 12,460.000\text{m}$ $H = 122.477\text{m}$

基準点2 $X = -78,760.000\text{m}$ $Y = 12,520.000\text{m}$ $H = 121.187\text{m}$

基準点3 $X = -78,760.000\text{m}$ $Y = 12,560.000\text{m}$ $H = 118.320\text{m}$

基準点1～3を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西に40m進み、更に基準線に直行する線上を北へ60m進んだ点を原点とした。

羽黒山麓Ⅰ遺跡

基準点1 $X = -78,688.000\text{m}$ $Y = 12,124.000\text{m}$ $H = 146.916\text{m}$

基準点2 $X = -78,688.000\text{m}$ $Y = 12,164.000\text{m}$ $H = 144.000\text{m}$

基準点1、2を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西に60m進み、更に基準線に直行する線上を北へ44m進んだ点を原点とした。

羽黒山麓Ⅱ遺跡

基準点1 $X = -78,748.000\text{m}$ $Y = 12,308.000\text{m}$ $H = 137.720\text{m}$

基準点2 $X = -78,748.000\text{m}$ $Y = 12,348.000\text{m}$ $H = 133.072\text{m}$

基準点1、2を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西へ48m進み、更に基準線に直行する線上を北へ52m進んだ点を原点とした。

3遺跡とも、原点より基準線に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とし、大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベット、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベットとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A1a0のように表した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数カ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行い、遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。検出された遺構には大グリッ

ド名と小グリッド名を組み合わせ、A I d 2 土坑のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は炭焼窯跡を4分法、土坑を2分法、溝跡については数カ所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名、遺構外のは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実 測

実測は簡易遣り方測量で行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、6×7 cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2 室内整理

(1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

(2) 遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した図版や写真の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。

- ・遺構図版……………1/40
- ・遺物図版……………土器-1/3、1/4 拓本-1/3 礫石器-1/3 剝片石器-1/2
- ・遺構写真……………不定
- ・遺物写真……………1/3

なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリントーンの種別と土器実測図の凡例は次のとおりである。



第4図 スクリントーン凡例

IV 千手堂遺跡

所在地 北上市和賀町山口38地割2-8ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局北上工事事務所
調査面積 6,900m²
調査期間 平成4年4月15日～7月31日
遺跡番号 ME63-0065
調査略号 SJ-92
調査担当者 文化財専門調査員 佐々木 信一
期限付専門職員 新倉 信一郎
協力機関 北上市教育委員会

1 遺跡の位置と立地

千手堂遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.8kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の北約1kmには和賀川が東流し、東側には鈴鴨川が北流している。遺跡の標高は116～123mで、和賀川との比高は9～16m、鈴鴨川との比高は5～12mである。遺跡の現況は畑地、山林である。

2 遺跡の土層

本遺跡は東から低位面、中位面、高位面の3つの面から成り立っており、土層もそれぞれ異なっている。

[低位面]

4層に分けられる。

I層 黒褐色土 シルト 表土。よくしまり、粘性がある。小礫を含む。層厚は10～20cm。

II層 黒褐色土 シルト よくしまり、I層より粘性がある。小礫をI層より多く含む。遺物を含む。層厚は8～15cm。

III層 褐色土 砂層 しまりはあるが、粘性はない。小礫を含む。

IV層 褐色土 砂礫層 しまりはあるが、粘性はない。礫を多く含む。層厚は不明。

[中位面]

4層に分けられる。

I層 黒～暗褐色土 シルト 表土。しまりはあるが粘性はない。小礫を含む。層厚は5～15cm。

II層 黒褐色土 シルト しまりがあり、粘性は弱い。小礫を含む。層厚は10～20cm。

III層 暗褐色土 砂層 しまりがなく、粘性もない。小礫を含む。層厚は10～20cm。

IV層 褐色土 砂礫層 しまりがなく、粘性もない。礫を多量に含む。層厚は不明。

[高位面]

6層に分けられる。

I層 黒褐色土 シルト 表土。しまりはあるが、粘性は弱い。小礫を含み、また、微細な炭化物も含む。層厚は20～30cm。

II層 褐色土 シルト かたくしまり、粘性がある。礫を含み、微細な炭化物も含む。層厚は25～30cm。

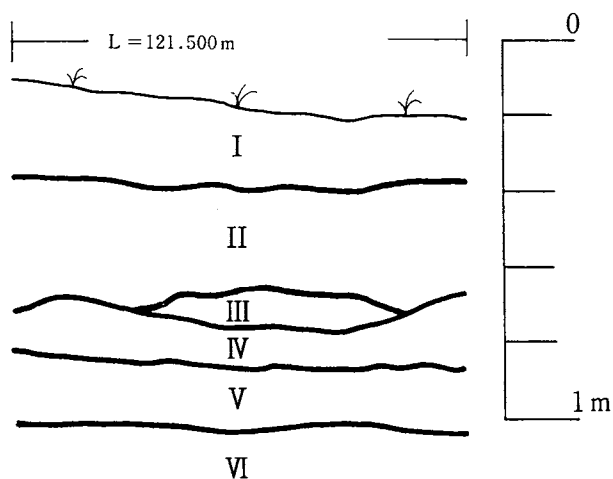
III層 褐色土 礫層 かたくしまる。層厚は0～10cm。

IV層 暗褐色土 シルト かたくしまり、粘性がある。小礫を含み、微細な炭化物も含む。層厚は10～20cm。

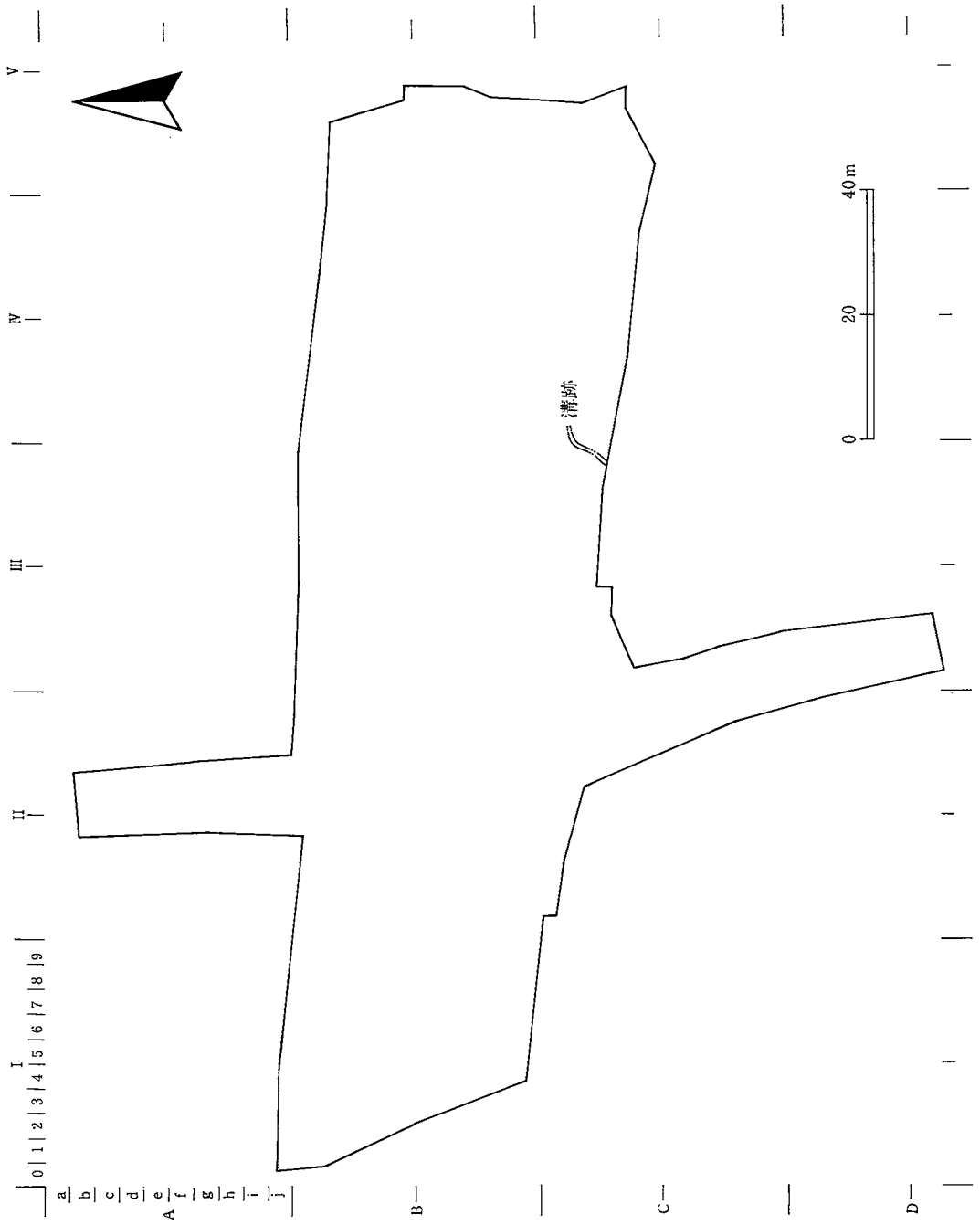
V層 暗褐色土 粘土質シルト かたくしまり、粘性がある。微細な炭化物を含む。層厚は10
~20cm。

VI層 褐色土 礫層 層厚は不明。

なお、土層断面は高位面でのものである。



第5図 土層断面図



第6図 千手堂遺跡遺構配置図

3 検出された遺構と出土遺物

調査の結果、時期不明の溝跡1条が検出された。また、出土遺物の総量はコンテナ1箱分である。土器は縄文土器、弥生土器、石器は搔・削器類、凹石である。

[1] 検出された遺構

溝跡 (第7図、写真図版5)

調査区域高位面の南東端に位置し、南西―北東に延びている。検出面はⅡ層である。

南西端は調査区域外へ延びており、北東端は中位面へ続く斜面で消滅している。全長7m、幅35～80cm、深さ16～40cmである。断面形はU字状で、底面は10～20cm大の礫が多く、凸凹がある。埋土は黒色土で、粘性は弱く、しまりにも欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

[2] 出土遺物

出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器である。高位面からの出土がほとんどである。

(1) 土器

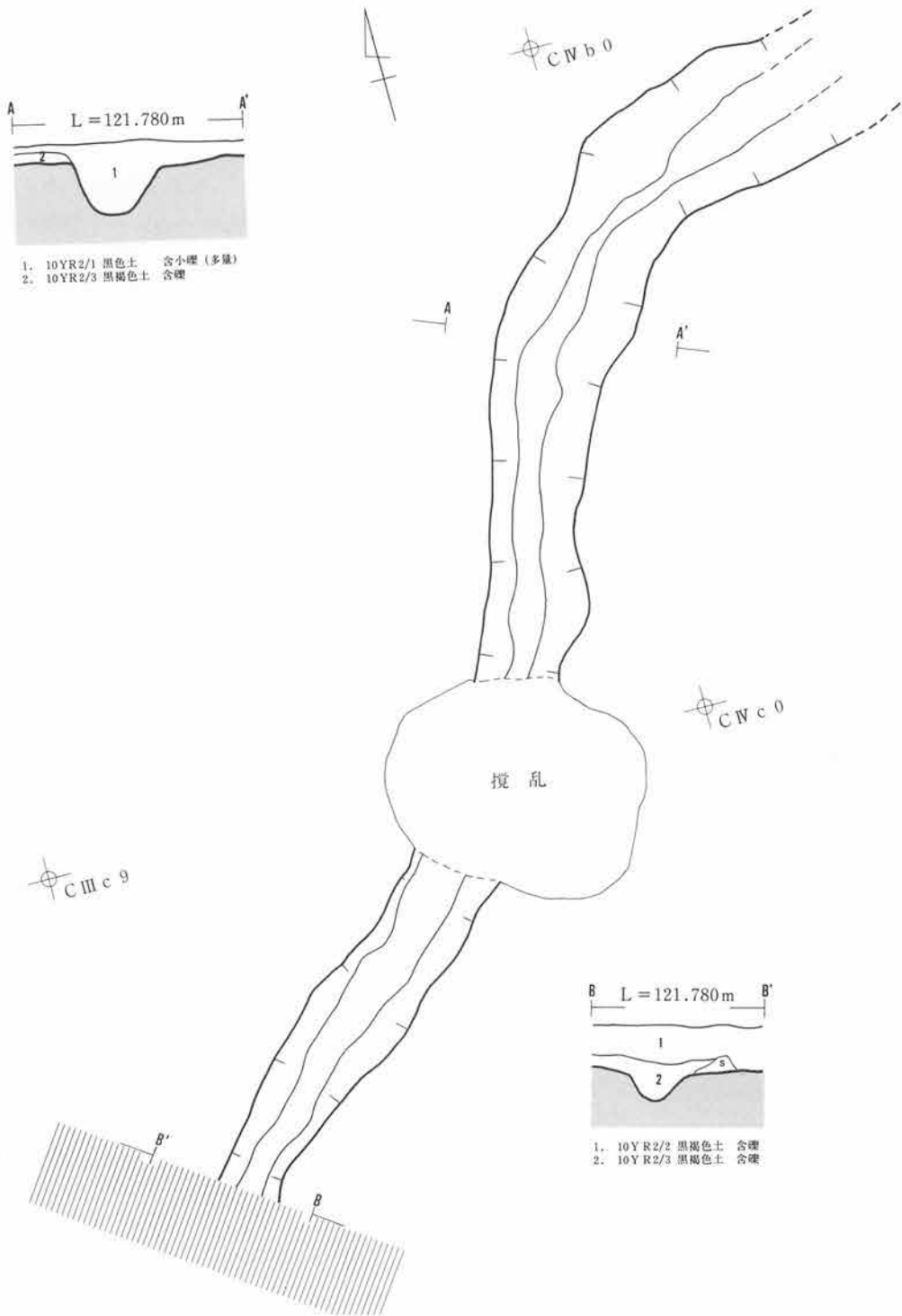
縄文時代中期・晩期、弥生時代初頭・後期の土器が出土している。記載にあたり、縄文時代の土器をⅠ群、弥生時代の土器をⅡ群に分類した。

Ⅰ群土器 (第8図、写真図版6)

縄文時代の土器群である。

1は深鉢の口縁部である。沈線で体部の文様帯と口縁部の無文帯を区分し、沈線の上には列点文が施され、口唇部は平に調整されている。地文はLR単節縄文縦回転である。2は深鉢の体部である。沈線区画された曲線的な磨消縄文が展開している。内面には炭化物が付着している。3は深鉢の口縁部である。頸部に沈線が3本巡り、口縁部は外反している。口縁部内面にも沈線が1本巡っている。地文はLR単節縄文横回転である。4は深鉢の体部である。5は台付鉢の台部で、下端に沈線が1本巡っている。胎土には金雲母が含まれている。6は壺の口縁部である。外反気味に立ち上がり、沈線が外面に2本、内面に1本巡っている。

時期は、1、2が中期末葉(大木10式相当)、3～5が晩期中葉(大洞C₂式相当)、6は晩期末葉(大洞A'式相当)である。



第7圖 溝跡

Ⅱ 群土器（第8図、写真図版6）

弥生時代の土器群である。

7、8は甕である。7は体部上半分に最大径を持ち、内湾しながら頸部へ続き、頸部から口縁部にかけて外傾している。口縁は緩やかな波状口縁で、地文はLR単節縄文横回転である。8は頸部に沈線が1本巡り、頸部から口縁部にかけて外傾している。口縁は山形状で、突起の頂部には刻があり、突起間の口唇部には沈線が巡っている。地文はLR単節縄文縦回転で、内外面共に炭化物が付着している。9～12は甕の体部で、燃糸文が施文されているものである。9、10は沈線区画内に施文されている。13、14は底部で、13は底面にも燃糸文が施文され、14は上げ底風になっている。

時期は、7、8が弥生時代初頭、9～14が弥生時代後期である。

(2) 石器（第9図、写真図版7）

器種は、石匙、搔・削器類、凹石、磨石である。

石匙（第9図、写真図版7）

15、16の2点で、15は刃部が一部欠損している。

搔・削器類（第9図、写真図版7）

17の1点である。二辺に表裏両面と片面から調整が加えられ、刃部が形成されている。

磨石（第9図、写真図版7）

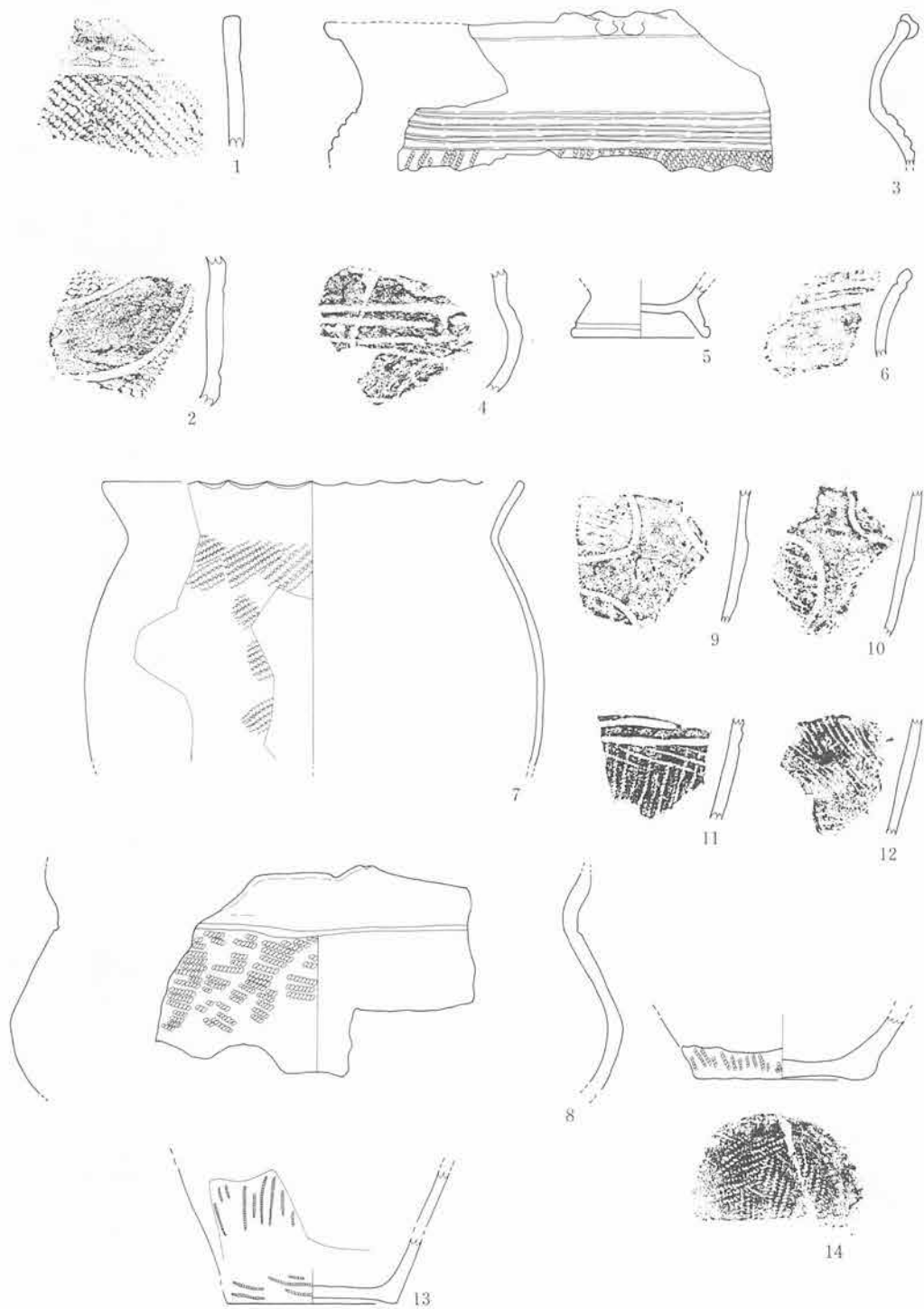
18の1点である。側面に擦痕がある。

凹石（第9図、写真図版7）

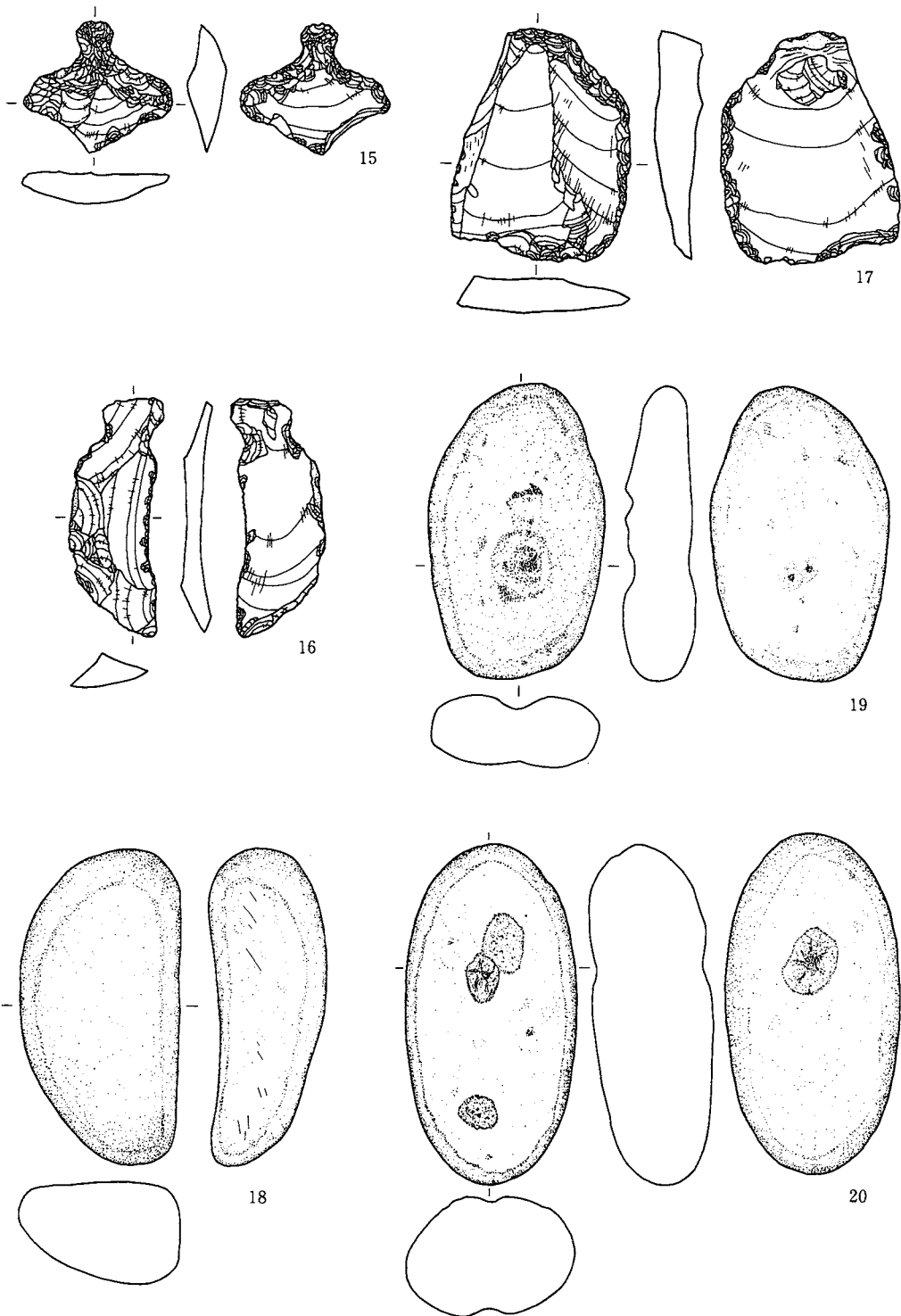
19、20の2点である。19は両面に1個ずつ、20は片面に2個の窪みを有している。

第2表 千手堂遺跡出土石器一覧表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材・産地・生成年代
15	石匙	B I e 5	3.8	4.4	1	9.8	チャート質粘板岩・北上山地・古生界
16	石匙	C I v c 5	7	2.8	1.1	15.1	玻璃質流紋岩・奥羽山地・中新統
17	搔・削器	B I v d 1	6.8	5.1	1.3	45.3	珩質泥岩・奥羽山地(川尻・横手)・中新統
18	磨石	B I v d 0	14.1	7.1	5.3	690	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統
19	凹石	C I I I b 8	13.1	7.8	3.2	352	デイサイト・夏油川-鈴鴨川下流・中新統
20	凹石	C I I I b 8	15.1	7.7	5.3	850	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統



第8图 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)

4 まとめ

調査の結果、時期不明の溝跡が1条検出された。

遺物は、縄文土器、弥生土器、石器が出土しており、高位面からの出土が大半である。土器を時期別にみると、縄文土器は中期末葉（大木10式）、晩期中葉（大洞C₂）、晩期末葉（大洞A'式）のものである。弥生土器は弥生時代初頭、後期のもので、小田野（1987）の編年によると第Ⅰ期と第Ⅳ期に相当すると考えられる。

石器は石鏃、不定形石器、磨石、凹石である。

住居跡は検出されなかったが、遺物が出土していることと遺跡の周辺の地形から考え、本遺跡の南西に集落跡が存在する可能性がある。

—参考文献—

小田野哲憲（1987）：「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号

V 羽黒山麓 I 遺跡

所在地	北上市和賀町山口23地割36ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局北上工事事務所
調査期間	平成4年9月21日～10月31日
調査面積	3,900m ²
遺跡番号	ME62-0052
調査略号	HGI-92
調査担当者	文化財専門調査員 伊東 格 佐々木 信一
	期限付専門職員 小山内 透 新倉 信一郎
協力機関	北上市教育委員会

1 遺跡の位置と立地

羽黒山麓Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.6kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の北約900mには和賀川が東流し、東約300mには鈴鴨川が北流している。遺跡は羽黒山（標高290m）の北側緩斜面にあり、標高は141～148m、和賀川との比高は34～41m、鈴鴨川との比高は30～37mである。遺跡の現況は放牧地、スキー場である。

2 遺跡の土層

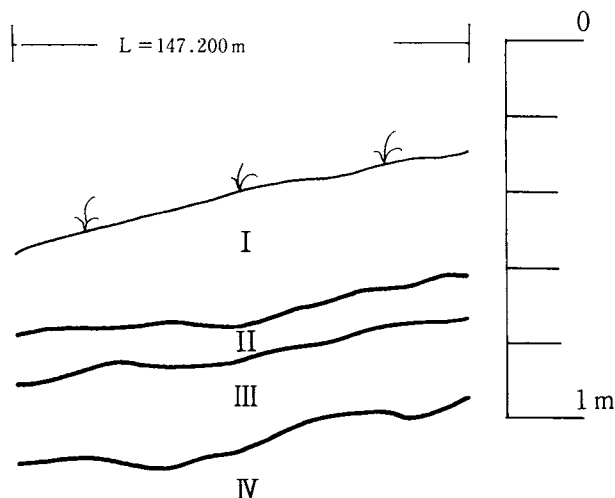
調査区域は、スキー場造成時に全面にわたって削平・攪乱を受けている。土層断面図は、比較的残存状況が良い調査区域中央部のものである。

Ⅰ層 黒褐色土 シルト 表土。スキー場造成時の客土で非常にかたい。層厚は20～25cm。

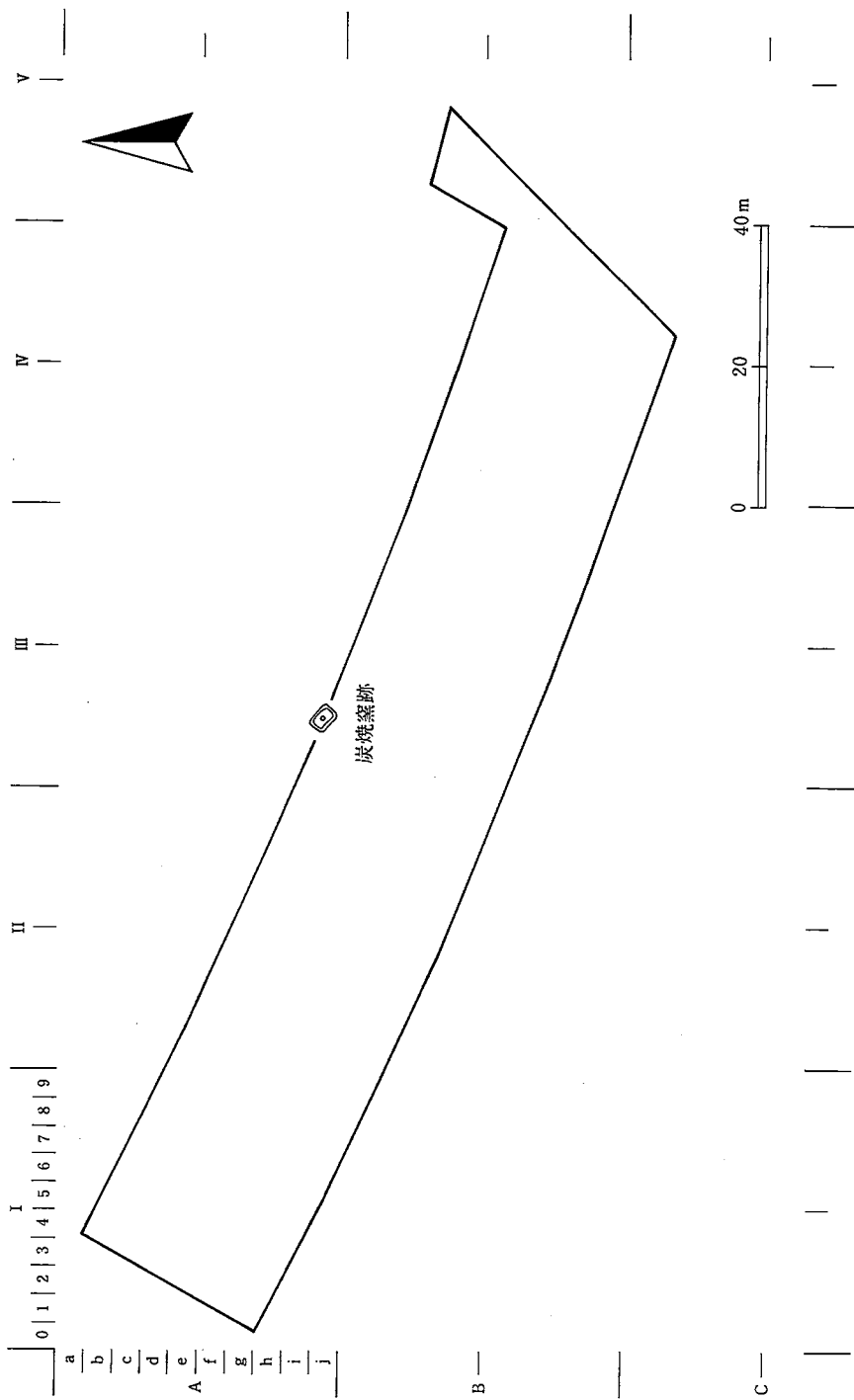
Ⅱ層 黒褐色土 シルト しまりがややあり、粘性もある。自然堆積層と推定されるが、スキー場造成時の削平のため、部分的にしか残存していない。層厚は10～15cm。

Ⅲ層 黒褐色土 シルト しまりがあり、粘性もある。こぶし大～人頭大の礫を多く含む。層厚は20～30cm。

Ⅳ層 黄褐色土 粘土質シルト しまりがあり、粘性もある。小礫を含む。層厚は不明。



第10図 土層断面図



第11図 羽黒山麓 I 遺跡遺構配置図

3 検出された遺構と出土遺物

調査の結果、時期不明の炭焼窯跡1基が検出された。また、出土遺物の総量はコンテナ1箱分である。土器は縄文土器、石器は石鏃、石錐、不定形石器である。

[1] 検出された遺構

炭焼窯跡（第12図、写真図版9・10図）

調査区域中央部北端の斜面下方で検出された。平面形は長辺にやや膨らみをもつ隅丸長方形で、中央部に円形の掘り込みを持つ。規模は長辺が4～4.2m、短辺が1.9～2.2m、深さは17～51cmである。底面はほぼ平坦で、細かい炭化物が散乱し、長辺に平行に数本の溝状の掘り込みがある。中央部の掘り込みは直径約110cm、深さは約90cmである。掘り込み面から底面にかけて焼成を受け、焼土が形成されている。焼燃部と思われる底面の焼土の下には、表面の炭化した材と礫が敷かれている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

[2] 出土遺物

出土した遺物は、縄文土器、石器で、縄文土器はほとんどが破片であり、復元できたものは少ない。

(1) 土器（第21図、写真図版10）

21は深鉢である。口縁部は内湾気味で、口唇部は平らに調整されている。地文はLR単節縄文が横回転で施文されており、外面は一部煤けている。22は深鉢の口縁部で、口唇部は平らに調整されている。地文はLR単節縄文が斜め回転で施文されている。23は深鉢の底部である。外底面を削り取って輪高台風になっている。全体に摩耗しており、地文は不明である。

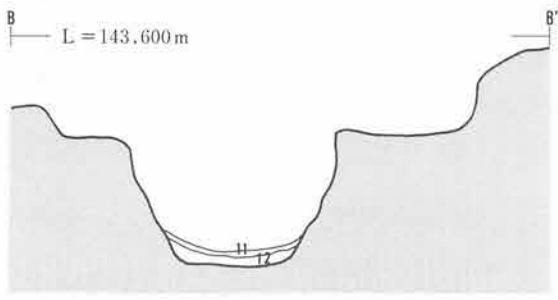
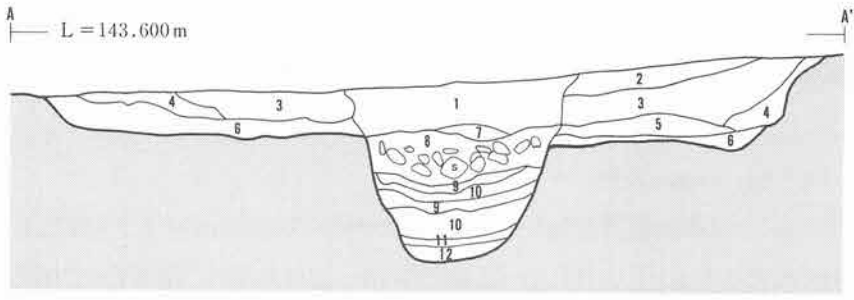
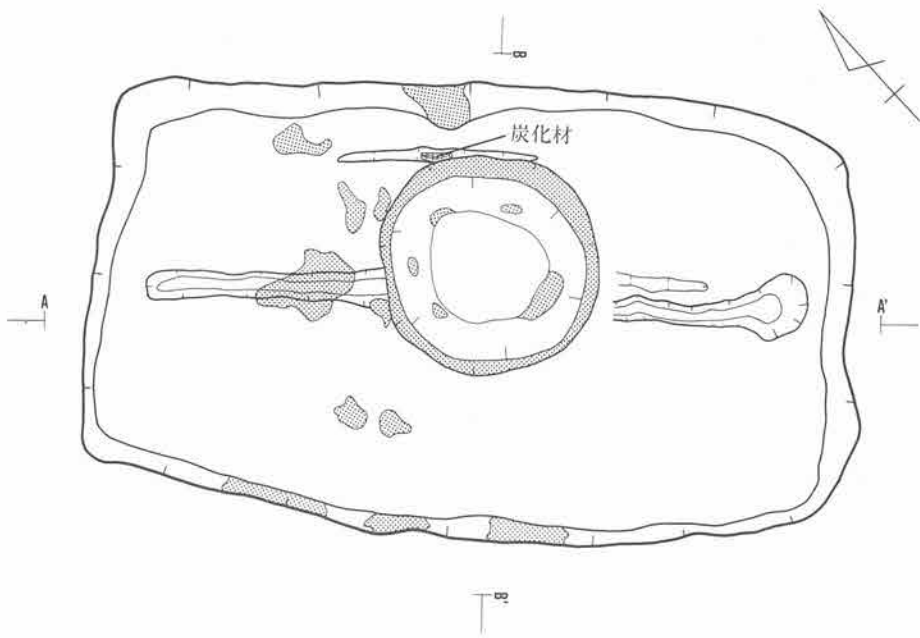
時期は、21、22は晩期初頭（大洞B式に相当）、23も21と共伴して出土していることから、前2者と同時期と考えられる。

(2) 石器（第13図、写真図版10）

器種は、石鏃、石錐、不定形石器である。

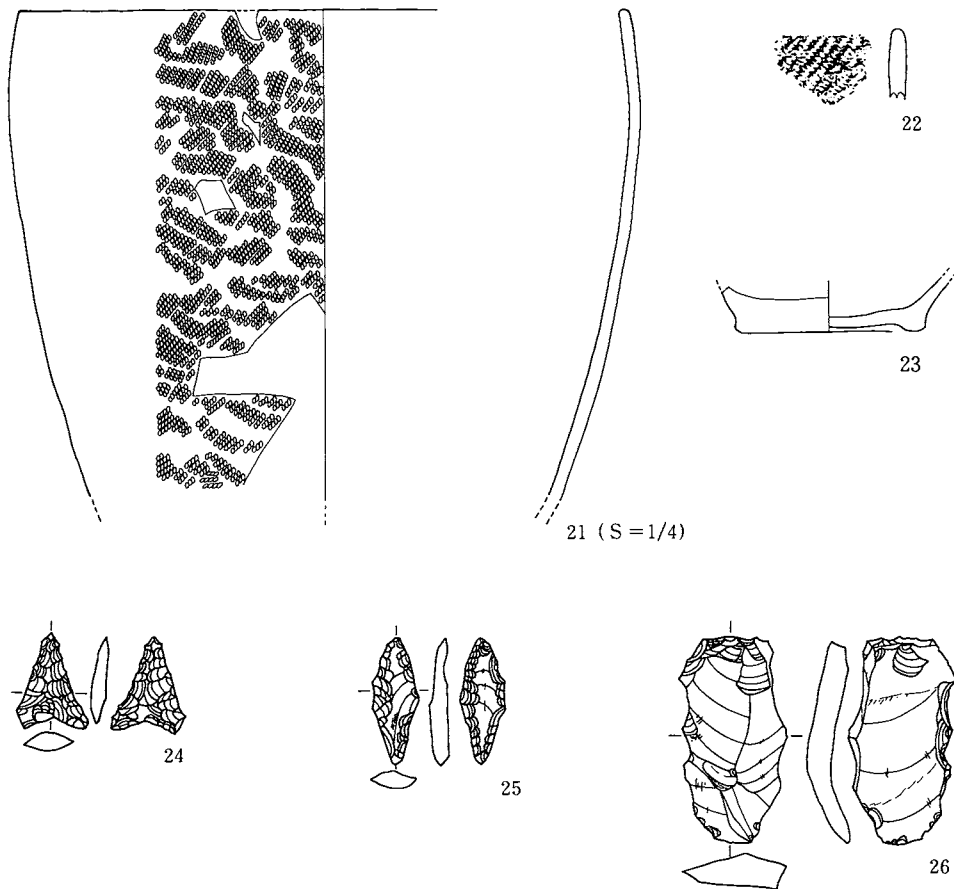
石鏃（第13図、写真図版10）

24の1点である。無茎で、基部には抉りが入っている。



- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|
| 1. 10YR 3/2 黑褐色土 含砂粒。 | 7. 10YR 2/3 黑褐色土 含礫 (多量) |
| 2. 10YR 2/2 黑褐色土 | 8. 10YR 2/3 黑褐色土 含礫 (多量) |
| 3. 10YR 2/1 黑色土 含塊土粒 (少量)・炭化物 (少量) | 9. 7.5YR 4/6 褐色土 含塊土・炭化物 |
| 4. 10YR 3/4 暗褐色土 含塊土粒 (少量)・炭化物 (多量) | 10. 7.5YR 1.7/1 黑色土 含炭化物 (多量) |
| 5. 7.5YR 2/2 黑褐色土 含塊土粒 (多量)・炭化物 (多量) | 11. 5YR 4/8 赤褐色土 |
| 6. 7.5YR 1.7/1 黑色土 含炭化物 (多量) | 12. 7.5YR 1.7/1 黑色土 含炭化物 (多量) |

第12図 炭焼窯跡



第13図 出土遺物

石錐（第13図、写真図版10）

25の1点で、錐部の先端が摩耗している。

不定形石器（第13図、写真図版10）

26の1点の出土である。

第3表 羽黒山麓I遺跡出土石器一覧表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材・産地・生成年代
24	石 鏃	BⅢd3 (I層)	2.5	2	0.5	1.3	珩質泥岩・奥羽山地 (川尻・横手)・中新統
25	石 錐	A I g 2	3.4	1.3	0.6	1.6	玻璃質流紋岩・奥羽山地 (川尻・横手)・中新統
26	不定形石器	不明	5.5	0.9	1	14.7	泥質凝灰岩・奥羽山地 (川尻・横手)・中新統

4 まとめ

調査の結果、時期不明の炭焼窯跡が1基検出された。

炭焼窯跡は、いわゆる「伏せ焼窯」で、底面には長辺に平行する細い溝状の掘り込みがあり、中央部には円形の掘り込みを持っている。岩手県内で、「伏せ焼窯」で底面に溝状の掘り込みを持つ例は県北の上斗内Ⅳ遺跡で検出されているが、本遺跡で検出された炭焼窯跡のように、溝状の掘り込みがあり、更に、中央部に円形の掘り込みを持つ例はない。溝状の掘り込みは、窯内に積み上げられた木が燃える際に生じる水分の排水と、底面近くの木が燃える際、床面と木の間に隙間をつくり燃焼を助けるためのものと考えられるが（註）、円形の掘り込みがどういふ性格のものかは不明である。あるいは、溝状の掘り込みと同様の性格を持つ可能性もあるが、類例の検出を待って今後の検討課題としたい。

遺物は縄文土器、石器が出土している。縄文土器は、時期は晩期初頭のものであり、石器は、石鏃、石錐、不定形石器である。

住居跡は検出されなかったが、遺物が出土していることと地形から考え、遺跡の南東に集落跡が存在する可能性がある。

註：岩手県木炭協会早坂松次郎氏の御教示による。

—参考文献—

岩手県埋蔵文化財センター（1984）：「上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書」
岩手県埋文センター文化財発掘調査報告書第71集

VI 羽黒山麓Ⅱ遺跡

所在地	北上市和賀町山口23地割55ほか
委託者	日本道路公団仙台建設局北上工事事務所
調査面積	4,300㎡
調査期間	平成4年8月3日～10月9日
遺跡番号	ME63-0073
調査略号	HGⅡ-92
調査担当者	文化財専門調査員 佐々木 信一 期限付専門職員 新倉 信一郎
協力機関	北上市教育委員会

1 遺跡の位置と立地

羽黒山麓Ⅱ遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南約1.7kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の北約1kmには和賀川が東流し、東約300mには鈴鴨川が北流している。遺跡の標高は132～140mで、和賀川との比高は25～33m、鈴鴨川との比高は21～29mである。遺跡の現況は山林、放牧地である。

2 遺跡の土層

本遺跡は東側が山林、西側が放牧地であり、土層が若干異なっている。

[東側]

4層に分けられる。

I層 黒褐色土 シルト 表土。しまりがなくやわらかいが、粘性はある。炭化物を含む。
層厚は10～15cm。

II層 褐色土 シルト しまりはなくやわらかいが、粘性はある。炭化物を含む。層厚は5～15cm。

III層 暗褐色土 シルト しまりがあり粘性もある。炭化物を含む。層厚は15～35cm。

IV層 黄褐色土 粘土質シルト
かたくしまり、礫を含む。

[西側]

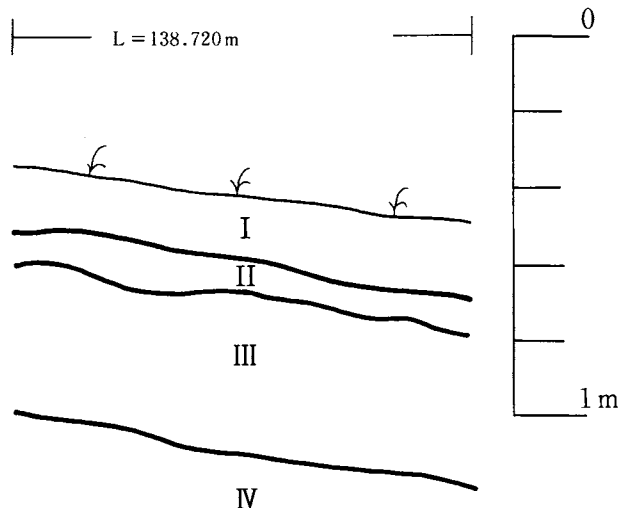
4層に分けられる。

I層 黒～暗褐色土 シルト
表土。しまりがなく、粘性も弱い。礫を含む。層厚は5～25cm。

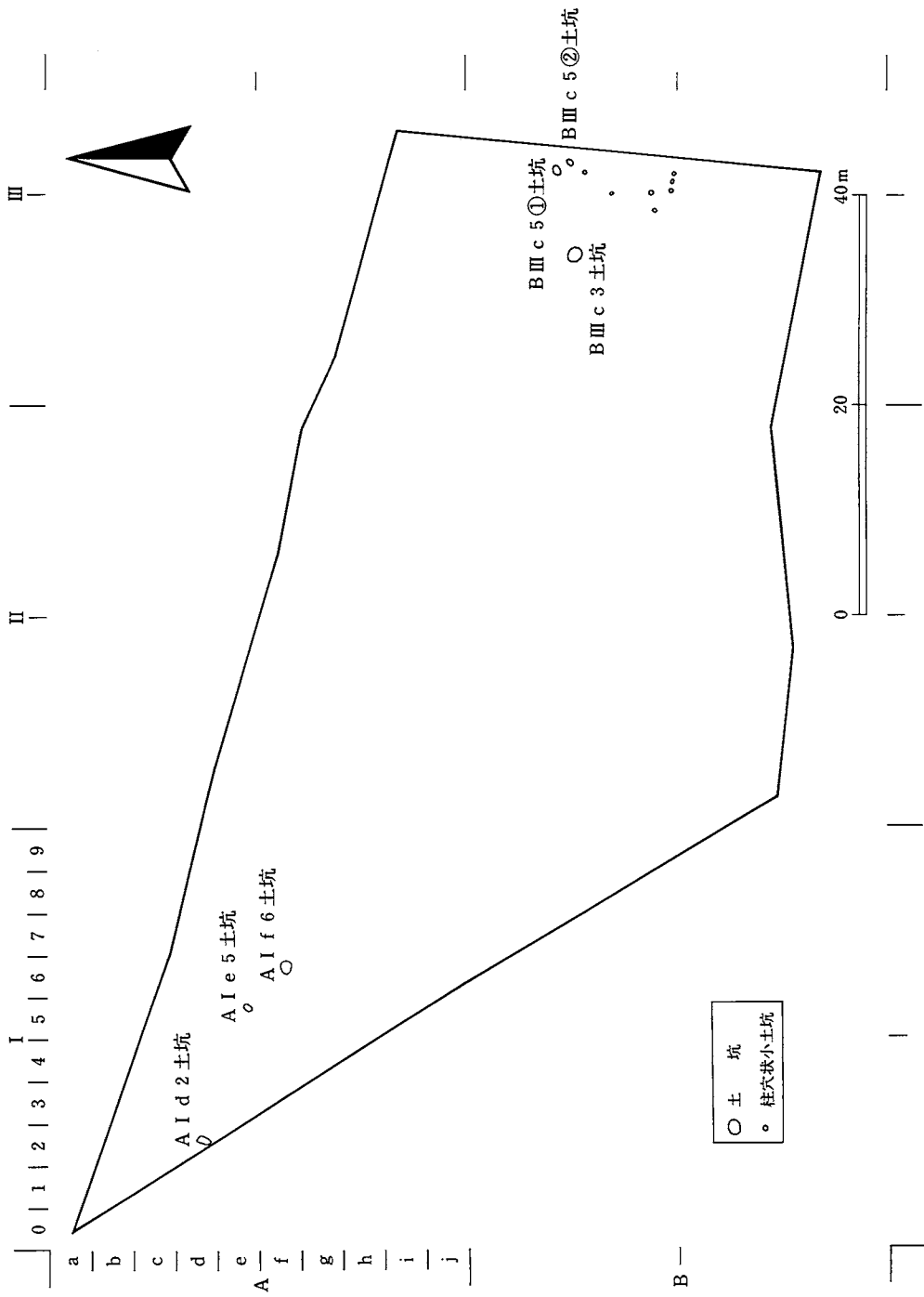
II層 暗褐色土 シルト
しまりがなく、粘性もない。
部分的に礫が多量に含まれる。
層厚は5～25cm。

III層 黒褐色土 シルト
しまりがあり、粘性も強い。
礫を含む。層厚は20～45cm。

IV層 黄褐色土 粘土質シルト
かたくしまり、礫を含む。



第14図 土層断面図



第15图 羽黒山麓Ⅰ遺跡遺構配置図

なお、土層断面図は調査区域西側のものである。

3 検出された遺構と出土遺物

調査の結果、土坑13基（柱穴状土坑7基を含む）が検出された。また、出土遺物の総量はコンテナ2.5箱分である。土器は縄文土器、弥生土器、石器は石鏃、石錐、石匙、石筥などである。

[1] 検出された遺構

土坑が13基（柱穴状土坑7基を含む）検出された。調査区域東端から3基、西端から10基である。

A I d 2 土坑（第16図、写真図版12）

調査区域北西グリッドA I d 2 に位置し、A I e 5 土坑の西北西約12mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径92×160cm、底部径65×105cm、深さは最深部で30cmである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底部は凸凹がある。埋土は3層に分けられ、炭化物が混入する暗褐色土が主体である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

A I e 5 土坑（第16図、写真図版12）

調査区域北西部グリッドA I e 5 に位置し、A I d 2 土坑の東南東約12.5m、A I f 6 土坑の北西約4mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径70×127cm、底部径46×92cm、深さは最深部で65cmである。壁は外傾気味に立ち上がり、底部は若干凸凹があるが、ほぼ水平で平坦である。埋土は3層に分けられ、礫を多量に含む黒褐色土が主体である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

A I f 6 土坑（第16図、写真図版12）

調査区域北西部グリッドA I f 6 に位置し、A I e 5 土坑の南東約4mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は円形で、規模は開口部径145×155cm、底部径108×118cm、深さは最深部で46cmである。壁は外傾気味に立ち上がり底部はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、礫を多量に含む黒

褐色土が主体である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

BⅢc3 土坑

遺構（第17図、写真図版12）

調査区域東部グリッドBⅢc3に位置し、BⅢc5①土坑の西南西約7mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径120×150cm、底部径70×85cm、深さは最深部で40cmである。壁は底部から20cm位までは外傾気味に立ち上がり、その後大きく外傾している。底部は若干凸凹があるが、ほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、上部は炭化物が混入する黒褐色土、下部は黒色土である。

遺物（第17図、写真図版14）

埋土下部から土器27～29が出土している。27は深鉢の体部上半部から口縁部である。口縁部に沈線が5本巡り、口唇部には小さな刻みがある。地文はLR単節縄文横回転である。外面には炭化物が付着している。28は鉢形土器の体部上半部から口縁部である。頸部は「く」の字状に屈曲し、沈線が3本巡っている。口縁部は外傾し、山形の突起があり、突起の両側の口唇部には沈線が巡り、内側にも沈線が1本巡っている。地文にはRL単節縄文が横回転で施文されている。また、内外面ともに炭化物が付着している。29は鉢形土器の口縁部である。沈線が3本巡り、中央の沈線には刺突が施されている。口縁部上端は外方へつまみ出され、口唇部には刻みが施されている。

時期

出土遺物から、縄文時代晩期中葉（大洞C₂式期）の可能性もある。

BⅢc5①土坑

遺構（第17図、写真図版13）

調査区域東端部グリッドBⅢc5に位置し、BⅢc5②土坑の北東約0.5m、BⅢc3土坑の東北東約7mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径84×100cm、底部径48×60cm、深さは最深部で20cmである。壁は外傾しながら立ち上がり、底部は凸凹があるが、ほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、礫混じりの褐色土が主体である。

遺物（第17図、写真図版14）

埋土下部から土器30が出土している。深鉢の体部片で、篋状の工具で文様が施されている。

時期

出土遺物から、縄文時代後期後葉の可能性がある。

BⅢc5②土坑

遺構（第17図、写真図版13）

調査区域東端部グリッドBⅢc5に位置し、BⅢc5①土坑の南東約0.5mにある。検出面はⅢ層である。

平面形は楕円形で、規模は開口部径80×105cm、底部径47×64cm、深さは最深部で25cmである。壁は外傾しながら立ち上がり、底部は凸凹があるが、ほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、褐色土が主体である。

遺物（第17図、写真図版14）

埋土上部から土器31が出土している。鉢形土器の体部片で、沈線が2本巡り、地文はLR単節縄文が横回転で施文されている。外面には炭化物が付着している。

時期

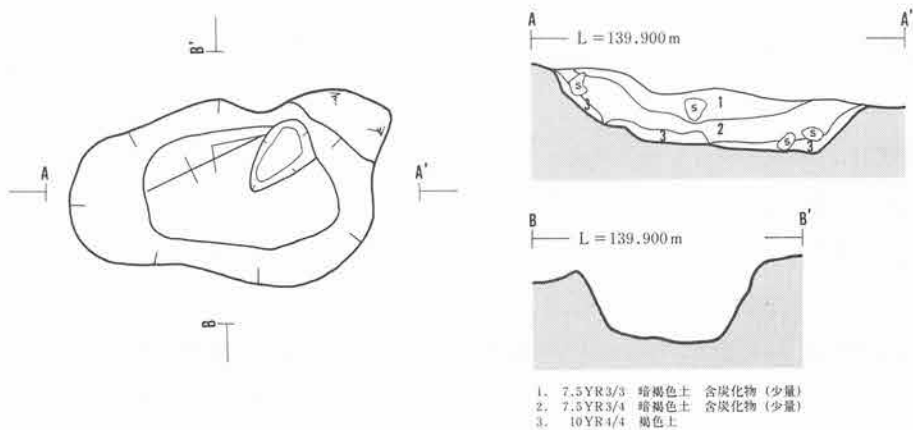
遺物は縄文時代晩期のもと思われるが、埋土上部からの出土であり、時期判定の資料としては不十分である。BⅢc5①土坑と隣接しており、遺構の規模・形態も類似していることから、同遺構と同時期の可能性がある。

柱穴状土坑（第18図、写真図版13）

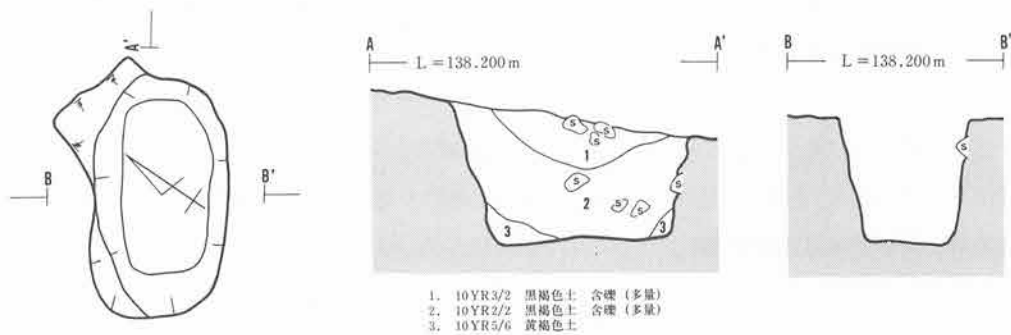
調査区域東端部から7基検出された。検出面はⅢ層である。

平面形は円形や楕円形で、規模は開口部径27～42×32～45cm、深さは17～40cmである。埋土は黒～暗褐色土が主体である。

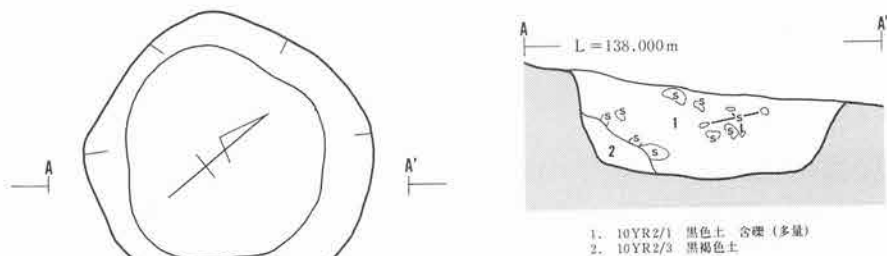
これらの柱穴状土坑は、竪穴住居跡等の柱穴をなすような規則的な配列ではなく、性格は不明である。また、出土遺物もなく、時期も不明である。



A I d 2 土坑

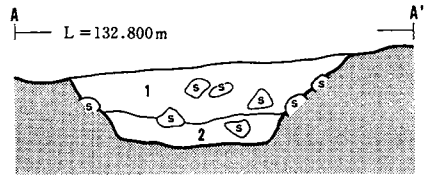
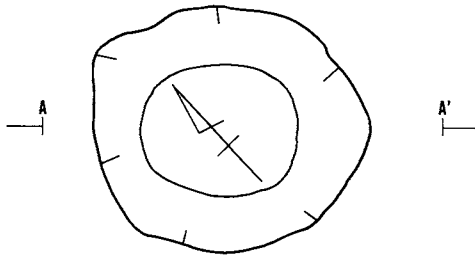


A I e 5 土坑

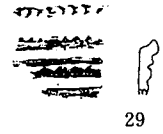
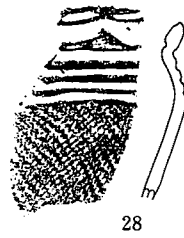
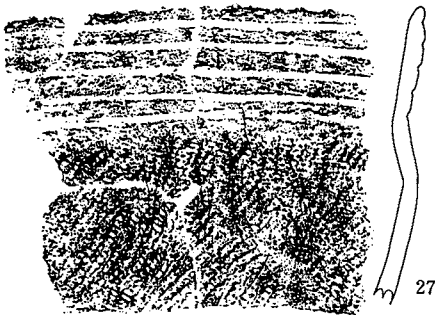


A I f 6 土坑

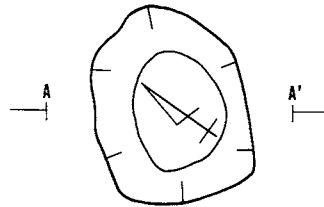
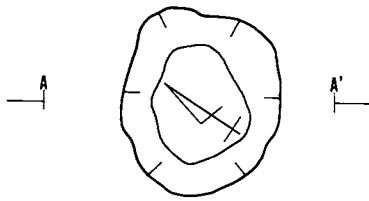
第16图 A I d 2 · A I e 5 · A I f 6 土坑



1. 10YR2/3 黑褐色土 含炭化物・礫 (少量)
2. 10YR2/1 黑色土 含礫 (少量)

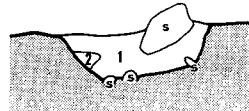
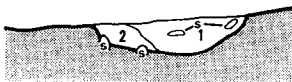


B III c 3 土坑・出土遺物



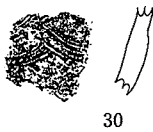
L = 133.600m

L = 133.600m



1. 10YR3/4 暗褐色土
2. 10YR4/4 褐色土 含礫

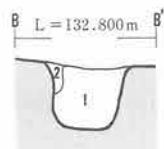
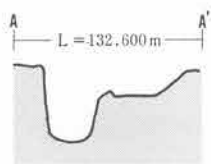
1. 10YR3/4 暗褐色土
2. 10YR4/4 褐色土 含礫



B III c 5 ①土坑・出土遺物

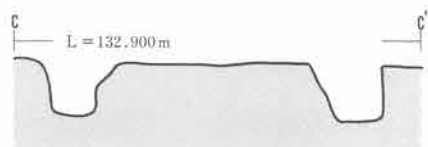
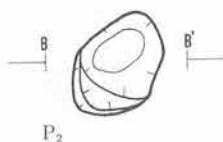
B III c 5 ②土坑・出土遺物

第17圖 B III c 3・B III c 5 ①・②土坑・出土遺物

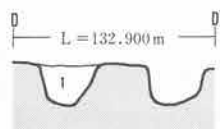


1. 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物(少量)
2. 10YR4/4 褐色土

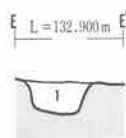
B III d 5



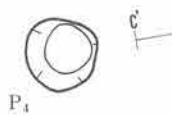
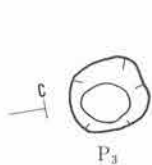
B III e 5



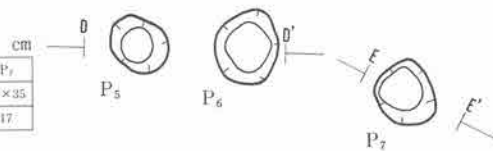
1. 10YR2/3 黑褐色土 含炭化物(少量)



1. 10YR2/3 黑褐色土 含炭化物(少量)



Na	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径	27×32	42×45	38×42	36×39	27×34	33×40
深	.40	.34	.30	.30	.21	.30



第18图 柱穴状土坑群

[2] 遺構外の出土遺物

出土遺物は縄文土器、弥生土器、石器である。調査区域東端部からの出土が多い。

(1) 土器

縄文時代中期・後期・晩期の土器、弥生時代中期の土器が出土しており、特に晩期の土器が多い。記載にあたり、縄文時代中期の土器をⅠ群とし、後期の土器をⅡ群、晩期の土器をⅢ群、縄文時代の土器で時期不明のものをⅣ群、弥生時代の土器をⅤ群に分類した。

Ⅰ群土器（第19図、写真図版14）

縄文時代中期の土器である。

32の1点の出土である。深鉢の口縁部で、沈線で渦巻文が施されている。地文はR L単節縄文の横回転である。大木8 b式に相当する。

Ⅱ群土器（第19図、写真図版14）

縄文時代後期の土器群である。

33は深鉢である。底部からやや外傾しながら立ち上がり、地文にはL R単節縄文が縦回転で施されている。内外面共に炭化物が付着している。34は鉢形土器である。底部は輪高台状の高台を貼り付け、上げ底風になっている。体部には沈線が2本巡り、地文にはL R単節縄文が縦回転で施文されている。内外面共に煤けている。35は深鉢の口縁部である。口縁部を平行沈線で区画し、その間に刻みを施している。口唇部は平らに調整されている。内面は煤け、外面には炭化物が付着している。36は深鉢の体部で、櫛搔文が施されている。33は後期初頭、34、35は後期中葉、36は後期後葉と考えられるが、33は中期末葉の可能性もある。

Ⅲ群土器（第19・20図、写真図版14・15）

縄文時代晩期の土器群で、大洞C₂式に相当するものである。

37、38は深鉢の口縁部である。口縁部に数条の沈線を巡らし、口唇部には小さな刻みが施されている。38には粘土粒が貼り付けられている。39は深鉢の体部上半部から口縁部である。口縁部には数条の沈線が巡り、口唇部には小さな刻みが施されている。口縁部内面上端には段が付されている。地文はL R単節縄文横回転である。

40～44は鉢形土器である。40は体部下半部から口縁部で、口縁部に大きな突起と2個一対の小突起がつき、口唇部には斜めの刻みが施されている。口縁部内面には沈線が1本巡っている。地文はL R単節縄文横回転である。内外面ともに煤けている。41～44は口縁部である。41は口唇部の突起間に沈線が施されている。42～44は口縁部上端が外方へ折れ、口唇部には刻みが施

されている。

45は浅鉢である。入り組み文が施され、口縁部には沈線が3本、内面にも2本巡っている。口縁は山形の小突起が連続する波状口縁で、口唇部の突起間には沈線が施され、沈線より内側には刻みがある。

46～49は台付鉢の台部で、下端に沈線が1本巡っている。43は底部にR L単節縄文、台部下端にはL R単節縄文がそれぞれ横回転で施文されている。

50は壺の頸部から口縁部である。頸部から外傾して立ち上がり、口唇部は隆帯状に突出し、その上下に沈線が1本ずつ巡っている。内面口縁部上端にも沈線が1本巡っている。

Ⅳ群土器（第20図、写真図版15）

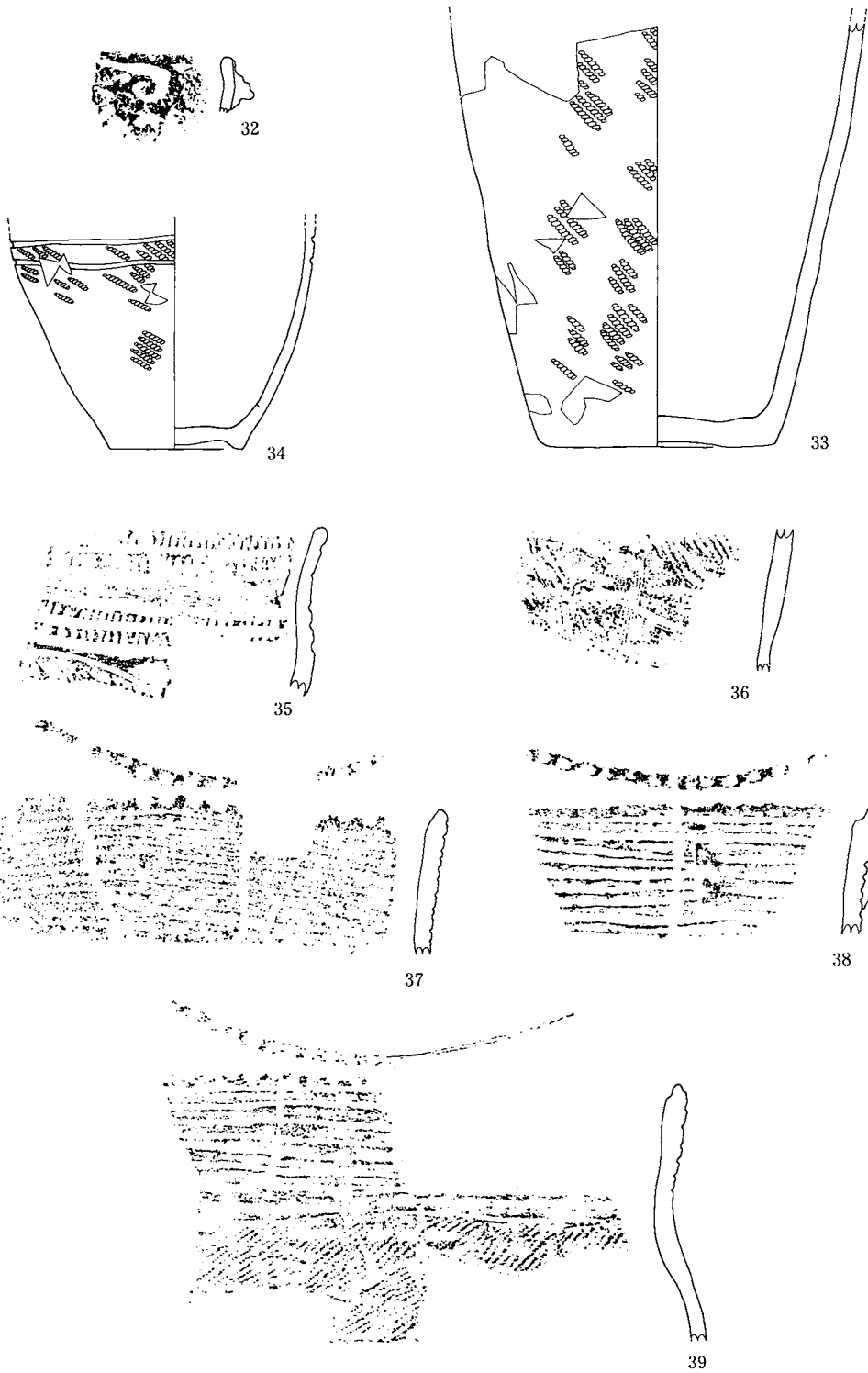
縄文土器であるが時期不明のものである。

51は深鉢の底部で、木葉痕が残る。

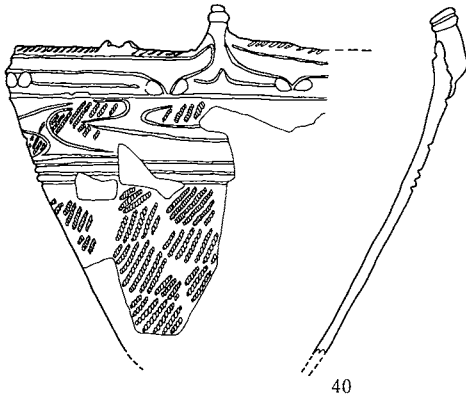
Ⅴ群土器（第20図、写真図版15）

弥生時代の土器群で、弥生時代中期のものである。

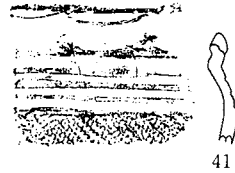
52は甕の体部上半部から口縁部である。体部は直立気味に立ち上がり、頸部から口縁部にかけては大きく外傾している。口唇部には連続的に刻みが施され、部分的に小突起があり、頂部は僅かに凹んでいる。地文は口縁部と体部共にR L単節縄文が横回転と斜め回転で施文されており、頸部付近は削られ無文帯となっている。内外面共に炭化物が付着している。53は甕の体部である。沈線で文様が描かれている。



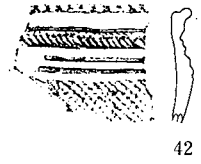
第19图 出土遺物(1)



40



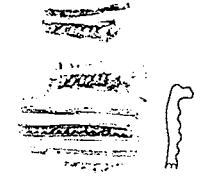
41



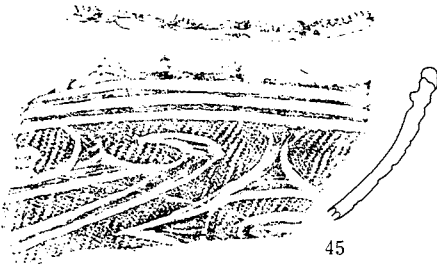
42



43



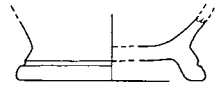
44



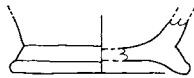
45



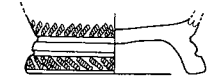
46



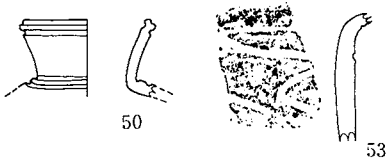
47



48



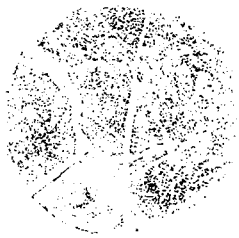
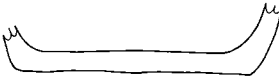
49



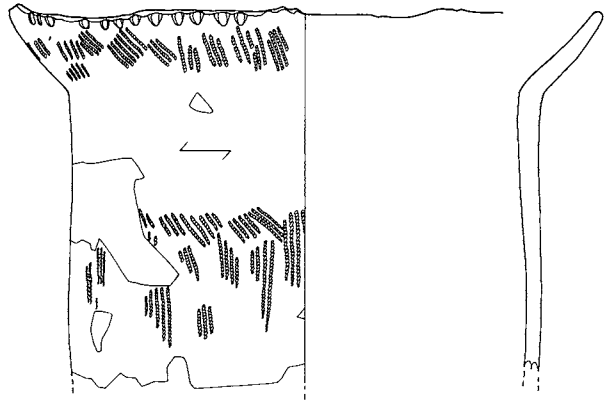
50



53



51



52

第20図 出土遺物(2)

(2) 石器

器種は、石鏃、石錐、石匙、石篋、石鋏、磨石、凹石である。

石鏃 (第21図、写真図版16)

54、55の2点である。54は有茎、55は無茎で、基部がU字状に窪んでいる。いずれも横断面形は菱形である。

石錐 (第21図、写真図版16)

56、57の2点である。両者とも錐部の先端が摩耗している。

石匙 (第21図、写真図版16)

58～65の8点である。58～62は縦形、63～65は横形で、61は先端部、64はつまみ部が欠損している。

石篋 (第22図、写真図版16)

66～68の3点である。66は基部側にも刃が形成されている。

石鋏 (第22図、写真図版16)

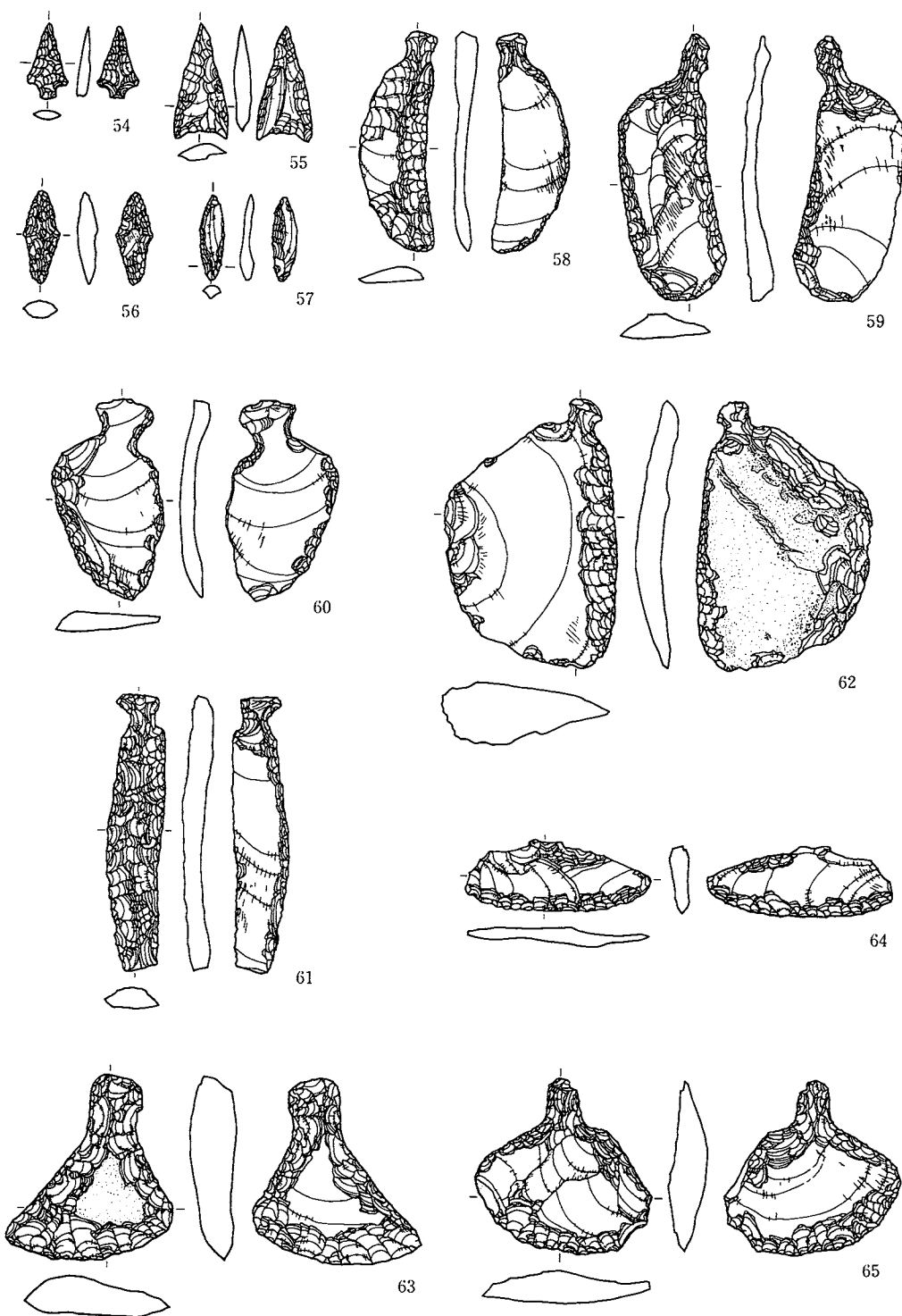
69の1点である。洋梨型で、中央部付近に自然面が残っている。

磨石 (第23図、写真図版16)

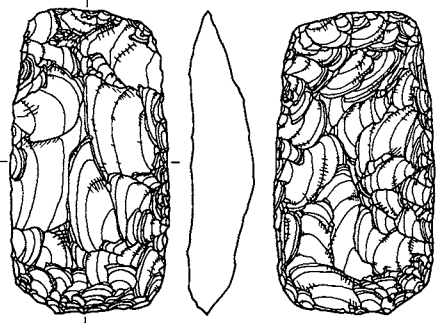
70の1点である。片面に擦痕が認められる。

凹石 (第23図、写真図版16)

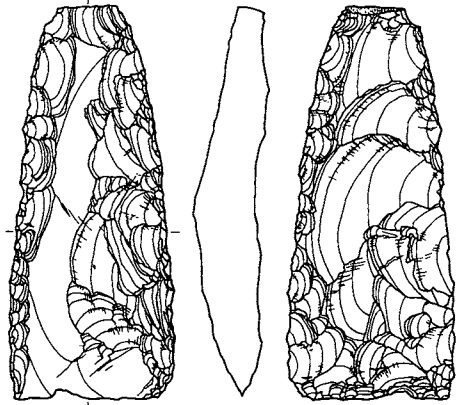
71の1点である。両面に2個の窪みを有している。



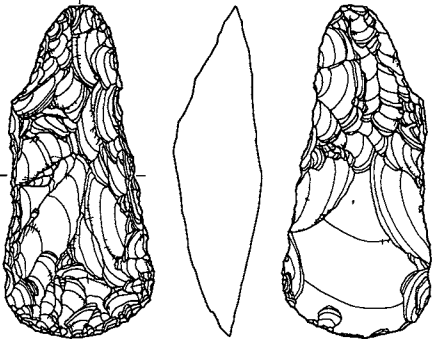
第21图 出土遺物(3)



66



68

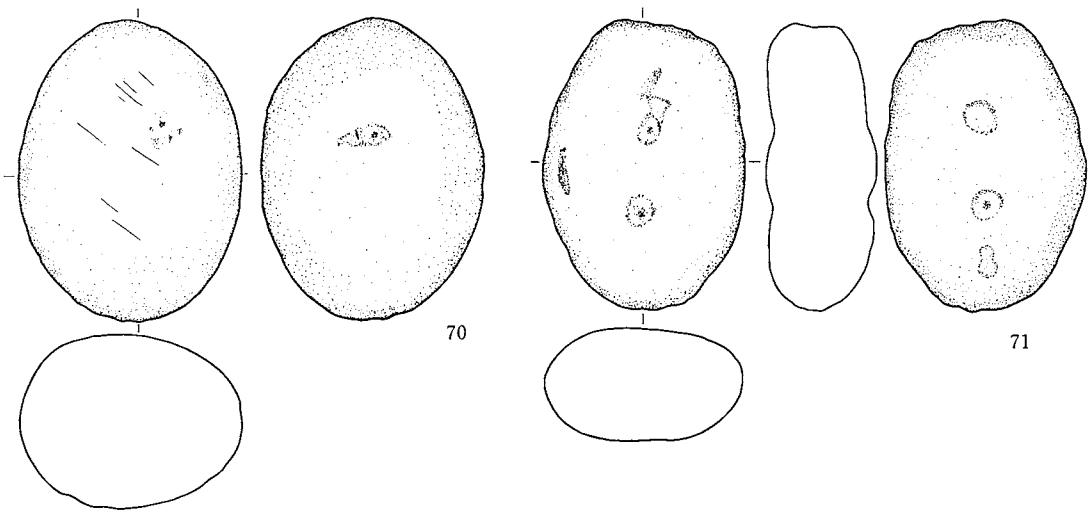


67



69 (S = 1/3)

第22図 出土遺物(4)



第23図 出土遺物(5)

第4表 羽黒山麓Ⅱ遺跡出土石器一覧表

番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材・山地・生成年代
54	石 鏃	BⅢc 5 (Ⅲ層)	2.2	1.2	0.4	0.6	珪質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
55	石 鏃	BⅢb 3 (Ⅱ層)	3.5	1.7	0.6	1.9	硬質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
56	石 錐	BⅢe 3 (Ⅲ層)	2.7	1.1	0.6	1.5	玻璃質流紋岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
57	石 錐	BⅢg 4 (Ⅱ層)	2.5	0.7	0.4	0.6	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
58	石 匙	BⅢc 2 (Ⅱ層)	6.6	2.1	0.6	72.4	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
59	石 匙	A I f 9	8	3.3	0.8	19	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
60	石 匙	BⅢe 4 (Ⅲ層)	6	3.4	6.5	11.6	珪質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
61	石 匙	BⅢc 5 (Ⅲ層)	8.2	1.7	7.6	11.1	硬質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
62	石 匙	BⅢe 3 (Ⅰ層)	8	5	2	70.9	硬質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
63	石 匙	BⅢc 4 (Ⅱ層)	5.6	4.9	1.5	23.8	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
64	石 匙	BⅢc 4 (Ⅱ層)	4.9	5.1	1.2	22.2	珪質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
65	石 匙	BⅢb 3 (Ⅱ層)	2.1	5.6	1.2	6.6	玻璃質流紋岩・奥羽山脈・中新統
66	石 筥	A I e 9 (Ⅲ層)	8	4.3	1.8	62.9	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
67	石 筥	A I d 0 (Ⅲ層)	8.9	4	2.3	72.5	硬質泥岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
68	石 筥	BⅢe 3 (Ⅱ層)	10.5	4.5	1.8	84.1	泥質凝灰岩・奥羽山脈(川尻・横手)・中新統
69	石 鍬	BⅢf 4 (Ⅱ層)	22	10.5	5.8	1050	デイサイト・夏油川-鈴鴨川下流・中新統
70	磨石	BⅢd 3 (Ⅱ層)	12	8.9	6.8	998	デイサイト・夏油川-鈴鴨川下流・中新統
71	凹石	BⅢe 4	11.4	7.9	4.5	560	両輝石安山岩・夏油川・駒ヶ岳火山

4 まとめ

調査の結果、土坑 6 基と柱穴状土坑 7 基が検出され、遺物は縄文土器、弥生土器、石器が出土した。

土坑は、調査区域西端と東端からそれぞれ 3 基ずつ、柱穴状土坑 7 基は調査区域東端から検出されている。

各土坑の平面形、規模は下表の通りである。

土坑一覧表

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	備考
①A I d 2 土坑	隅丸長方形	92×160	30	
②A I e 5 〃	〃	70×127	65	
③A I f 6 〃	円形	145×155	46	
④B III c 3 〃	楕円形	120×150	40	遺物有
⑤B III c 5 ① 〃	〃	84×100	20	〃
⑥B III c 3 ② 〃	〃	80×105	25	〃
柱穴状土坑 P ₁	〃	27×32	40	
〃 P ₂	〃	42×45	34	
〃 P ₃	〃	38×42	30	
〃 P ₄	円形	36×39	30	
〃 P ₅	〃	27×34	21	
〃 P ₆	〃	33×40	20	
〃 P ₇	〃	30×35	17	

(土坑番号は遺構配置図の番号と同じ)

B III c 3、B III c 5 ①・②土坑からは遺物が出土しており、時期は縄文時代後期 (B III c 5 ①・②土坑)、縄文時代晩期中葉 (B III c 3 土坑) の可能性があるが、他の土坑は出土遺物がなく時期は不明である。

縄文土器は、時期別に見ると中期末葉、後期初頭～後葉、晩期中葉で、晩期中葉のものが多く出土している。弥生土器は弥生時代中期のもので、小田野 (1987) の編年の第Ⅲ期に相当すると考えられる。

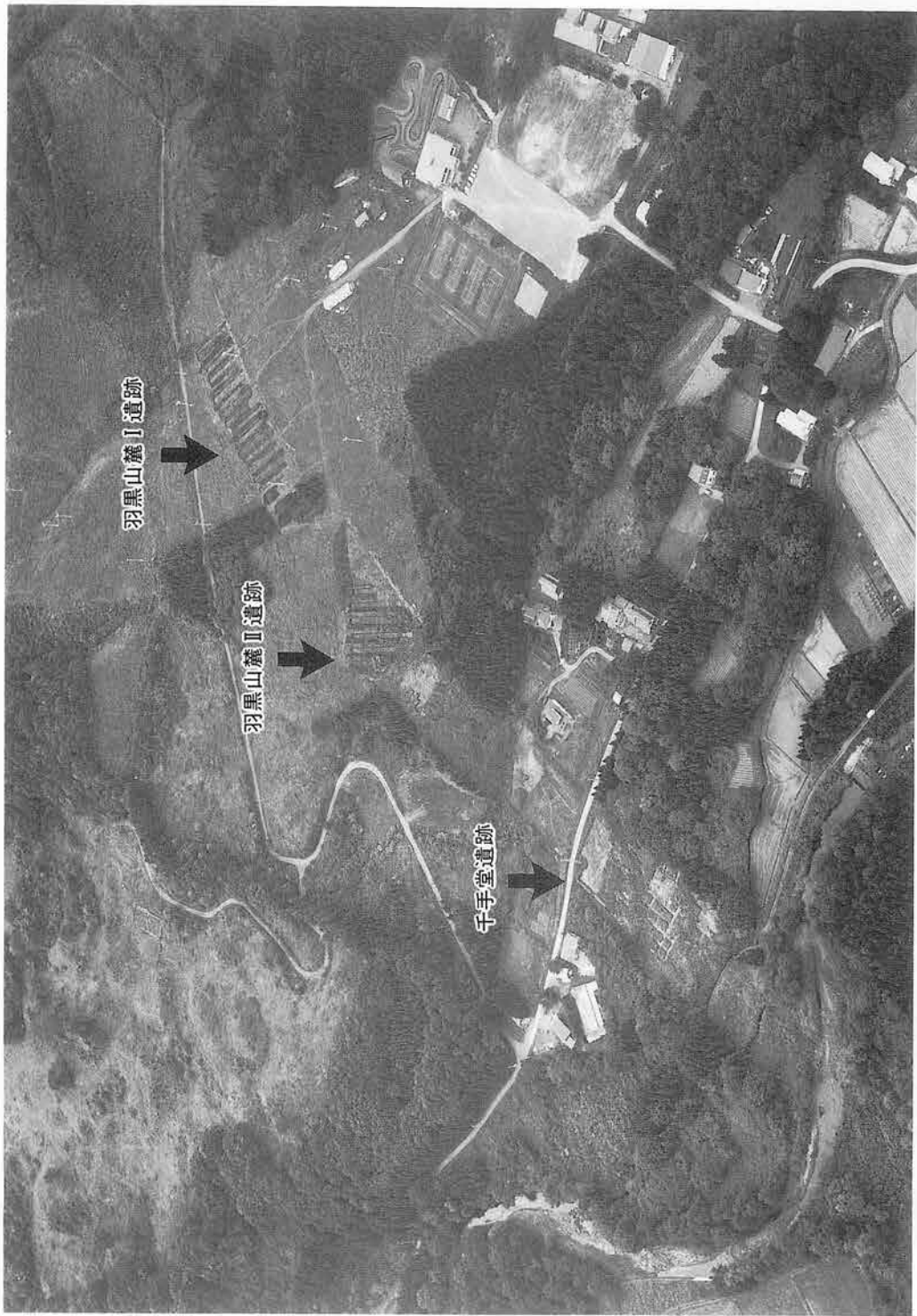
石器は、石鏃、石錐、石匙、石鏡、石鋏、磨石、凹石で、石匙が多く出土している。

本遺跡から住居跡は検出されなかったが、遺物が出土していることと地形から考え、本遺跡の南西に集落跡が存在する可能性がある。

—参考文献—

小田野哲憲 (1987) : 「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第 5 号

写 真 图 版



写真図版1 千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡全景（北東から）



遠景（東から）



高位面近景（東から）

写真図版2 千手堂遺跡遠景・近景



中位面近景（北西から）



低位面近景（北西から）

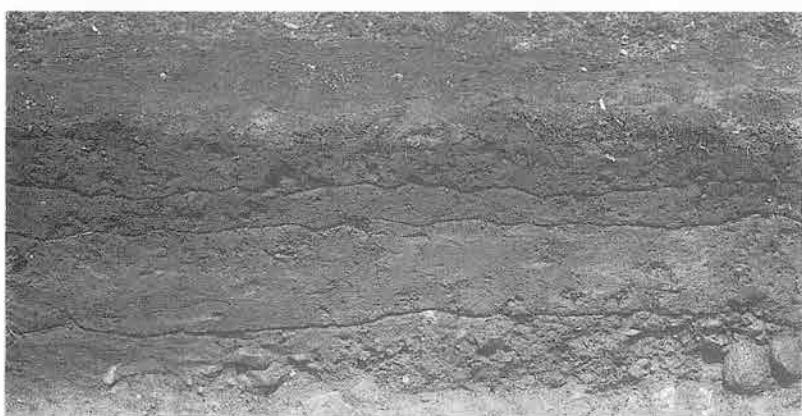
写真図版3 千手堂遺跡近景



高位面
基本土層
(南から)



中位面
基本土層
(南から)



低位面
基本土層
(南から)

写真図版4 千手堂遺跡基本土層



溝跡完掘全景（南西から）



溝跡断面A-A'（南西から）

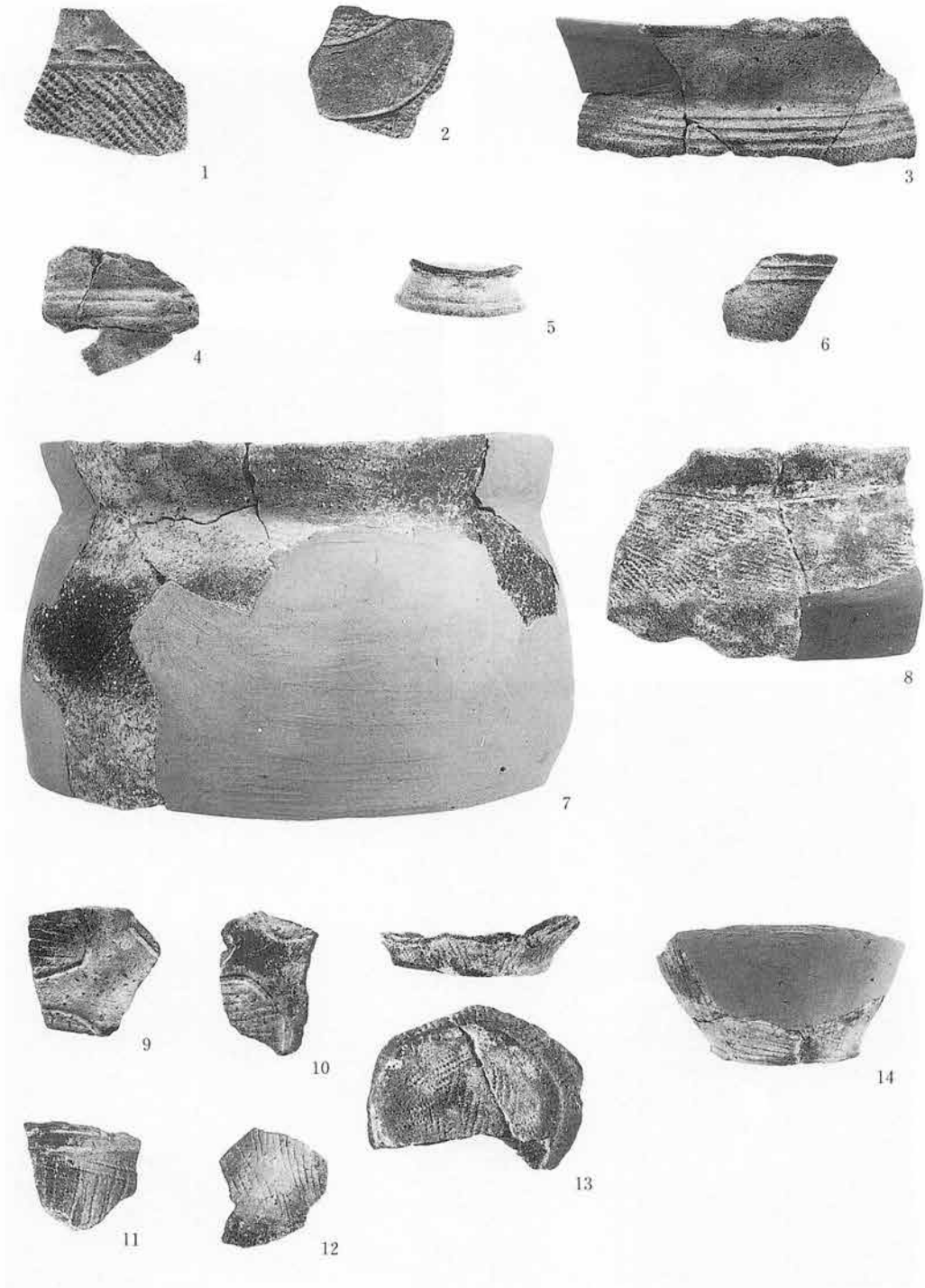


溝跡断面B-B'（北東から）



作業風景（北西から）

写真図版5 溝跡・作業風景



写真図版 6 出土遺物(1)



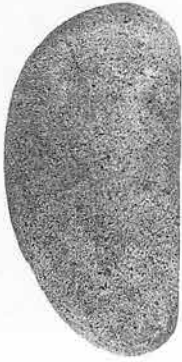
15



16



17



18



19

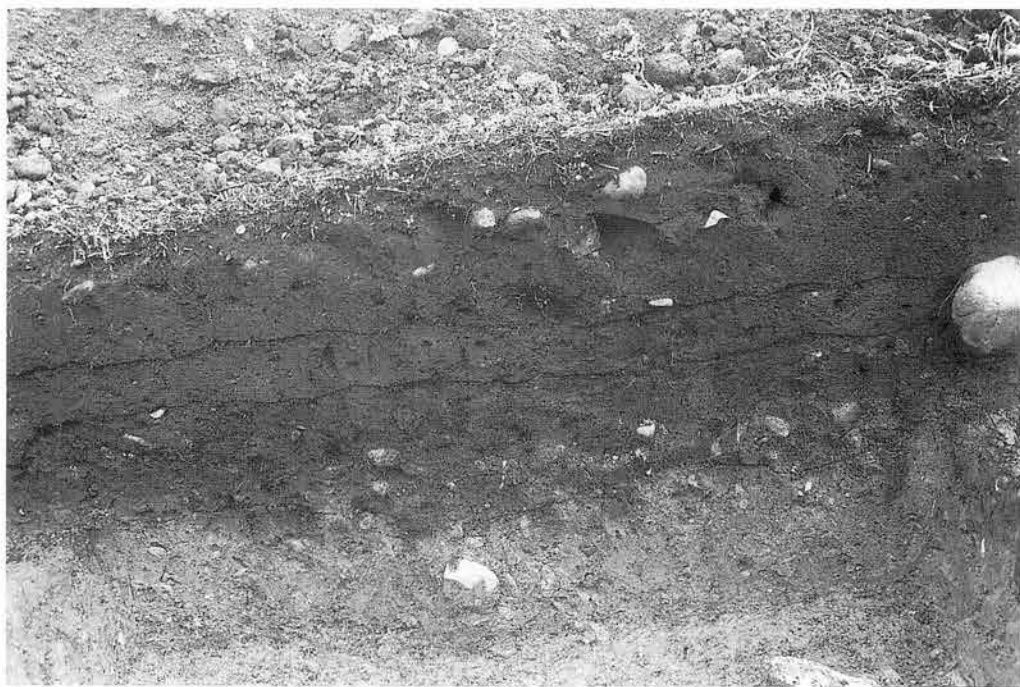


20

写真図版 7 出土遺物(2)



近景（南西から）



基本土層（北西から）

写真図版 8 羽黒山麓 I 遺跡近景・基本土層



完掘全景（北西から）

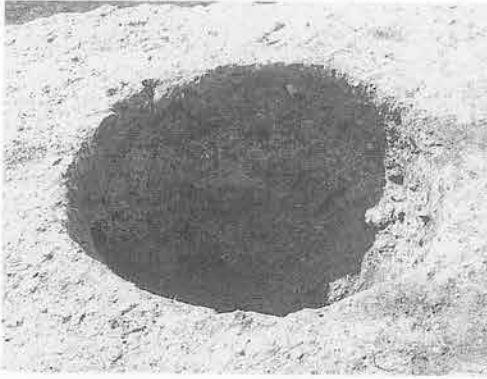


埋土土層断面（南西から）

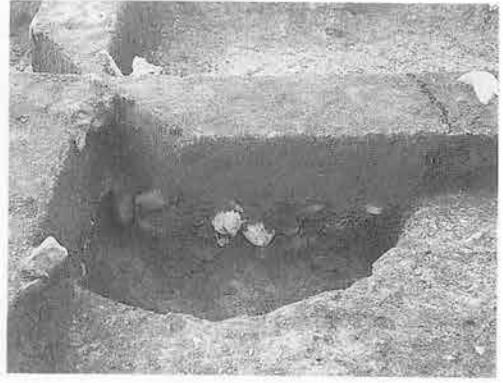


埋土土層断面（北西から）

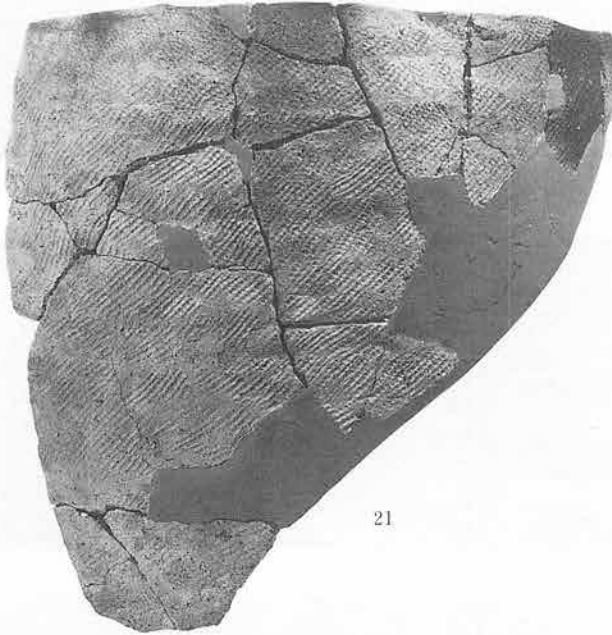
写真図版 9 炭焼窯跡



掘り込み完掘全景（北東から）



埋土断面（北東から）



21

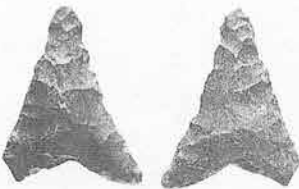


22



23

21 S = 1/4
22, 23, 26 S = 1/2
24, 25 S = 1/1



24



25

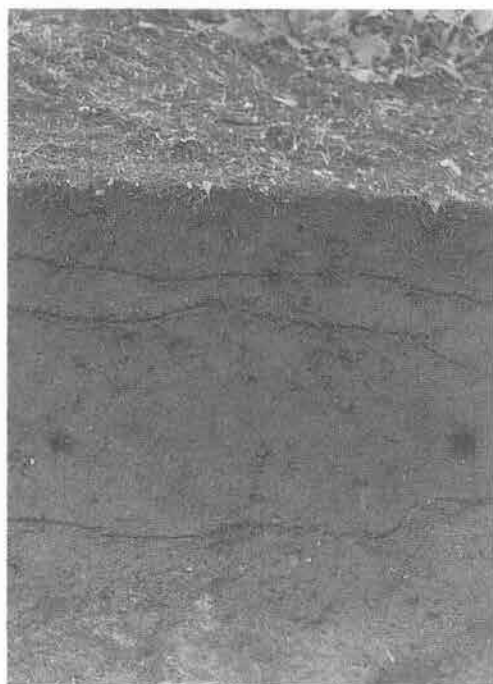


26

写真図版10 炭焼窯跡・出土遺物



近景（東から）



東側基本土層（東から）



西側基本土層（南東から）

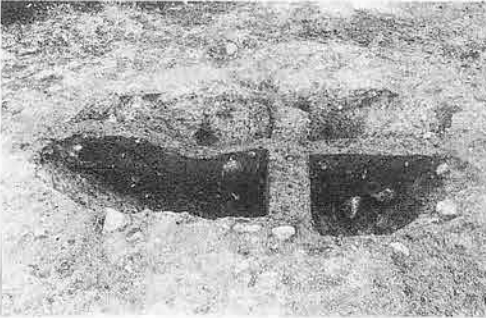
写真図版11 羽黒山麓Ⅱ遺跡近景・基本土層



完掘全景（南西から）



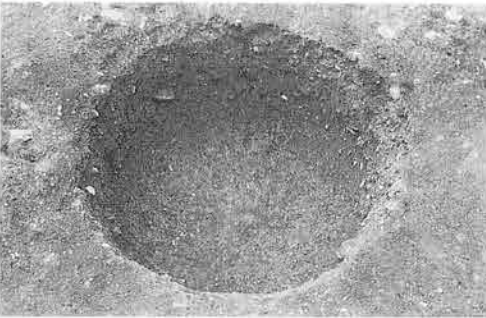
完掘全景（北東から）



A I d 2 土坑断面（北西から）



A I e 5 土坑断面（南東から）



完掘全景（北東から）



完掘全景（南西から）



A I f 6 土坑断面（南東から）



B III c 3 土坑断面（南西から）

写真図版12 A I d 2・A I e 5・A I f 6・B III c 3 土坑



完掘全景 (南西から)



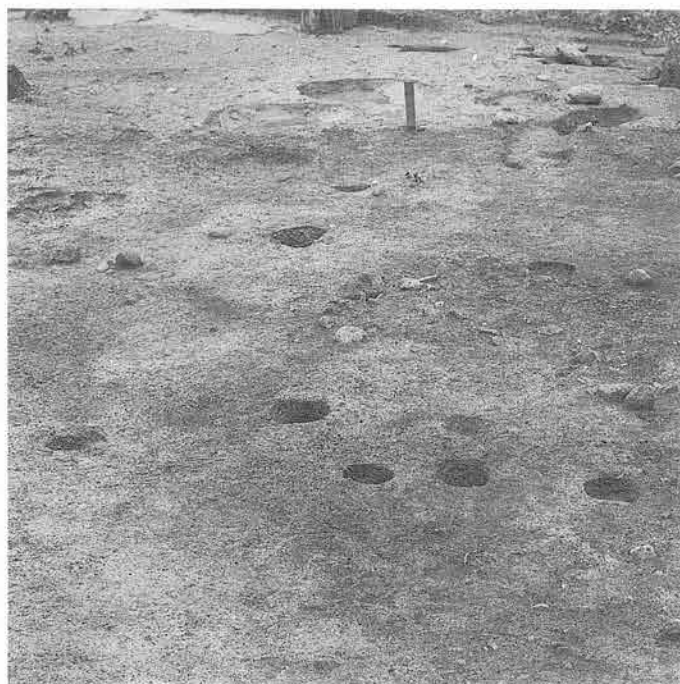
完掘全景 (南西から)



B III c 5 ①土坑断面 (南西から)



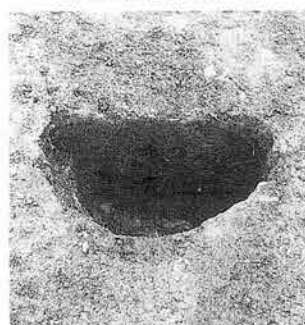
B III c 5 ②土坑断面 (南西から)



柱穴状土坑群完掘全景 (南から)

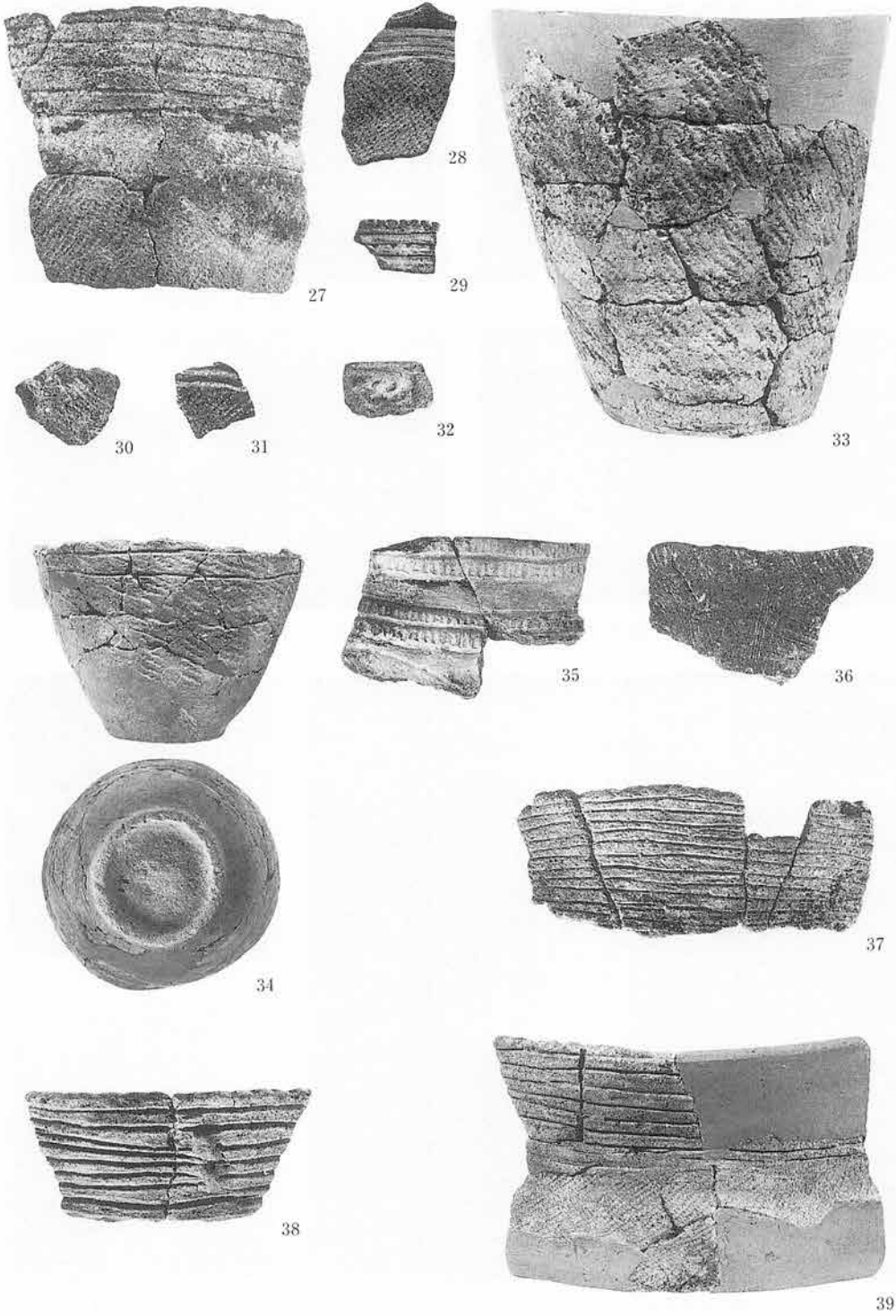


土坑P₂断面 (南から)



土坑P₅断面 (南から)

写真図版13 B III c 5 ①・②土坑、柱穴状土坑群



写真図版14 出土遺物(1)



40



41



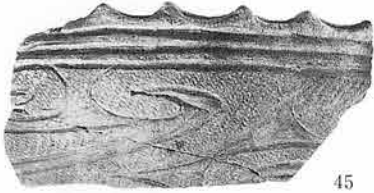
42



43



44



45



46



47



50



48



49



51

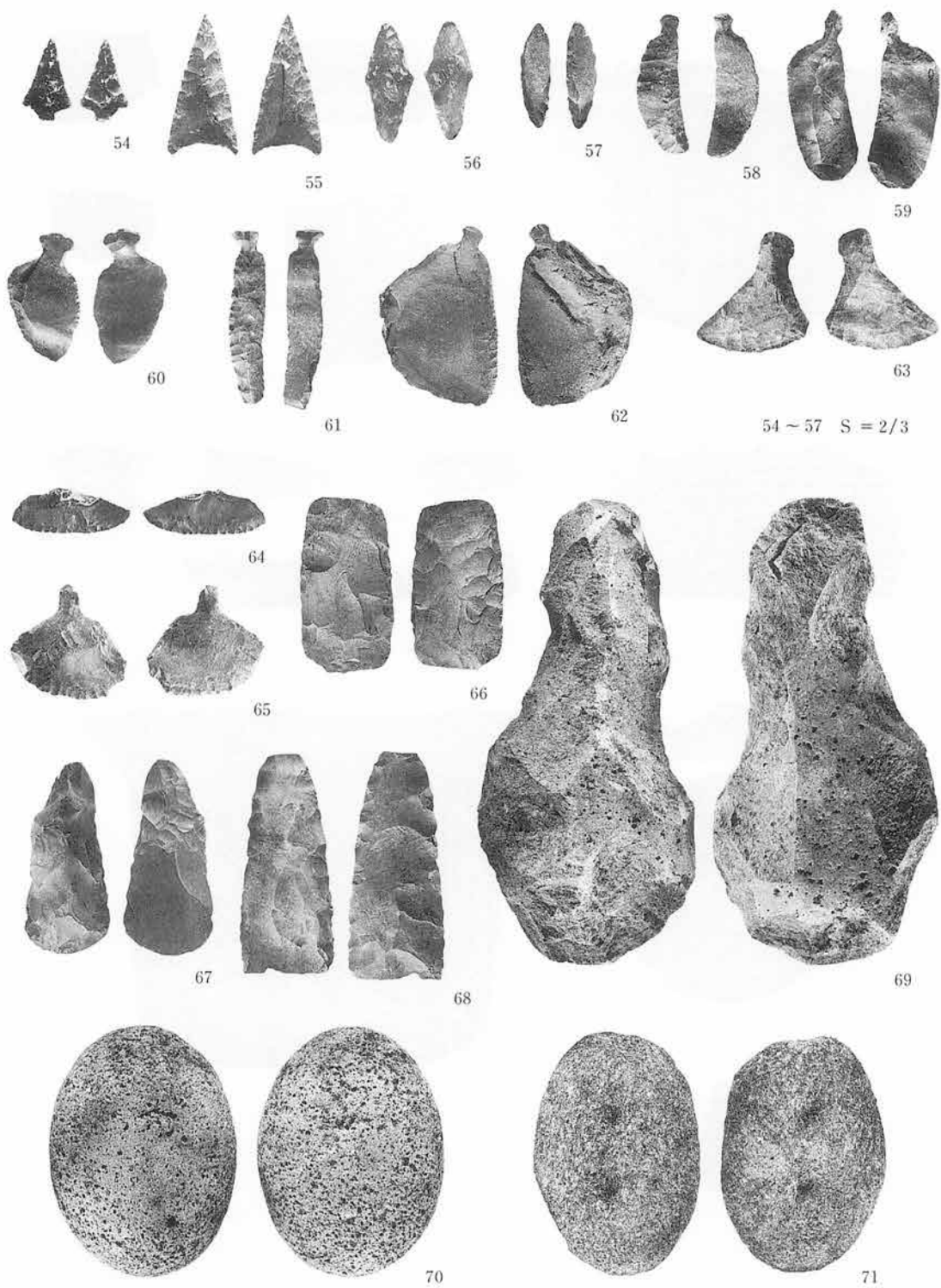


52



53

写真図版15 出土遺物(2)



写真図版16 出土遺物(3)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 高 橋 重 實

副 所 長 高 橋 敬 明

[管理課]

管 理 課 長 澤 田 寛

主 事 佐 藤 理

〃 久保田 幸 恵

嘱 託

吉 田 十 次

〃 野 崎 他 夫

[調査課]

調 査 課 長 鈴 木 恵 治

課 長 補 佐 三 浦 謙 一

〃 高 橋 與 右 衛 門

主任文化財
専門調査員

菊 池 強 一

〃 渡 辺 洋 一

〃 高 橋 正 之

〃 工 藤 利 幸

〃 中 川 重 紀

〃 佐々木 清 文

文 化 財
専門調査員

高 橋 義 介

〃 斎 藤 實

〃 千 葉 孝 雄

〃 川 村 均

〃 鈴 木 貞 行

〃 伊 東 格

〃 吉 田 充

〃 斎 藤 邦 雄

〃 神 敏 明

〃 高 橋 一 浩

〃 小 原 眞 一

〃 酒 井 宗 孝

〃 鎌 田 勉

〃 小山内 透

文 化 財
専門調査員

松 本 建 速

〃 笹 平 克 子

〃 花 坂 政 博

〃 佐々木 務

〃 金 子 昭 彦

〃 濱 田 宏

〃 阿 部 勝 則

〃 星 雅 之

〃 羽 柴 直 人

〃 高 木 晃

〃 村 上 拓

期 限 付
専門職 員

鎌 田 精 造

〃 柳 田 磨

〃 千 葉 悟

〃 高 橋 英 樹

〃 溜 浩 二 郎

〃 佐 藤 修 一

〃 稲 垣 雅 宏

〃 田 畑 博 之

〃 八重樫 のり子

〃 杉 沢 昭 太 郎

〃 平 澤 祐 子

[資料課]

資 料 課 長 村 松 義 夫

主任文化財
専門調査員 駒 嶺 高 幸

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第198集

千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成5年6月25日

発行 平成5年6月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001・9002 FAX (0196) 38-8563

印刷 (株)吉田印刷

〒020 岩手県盛岡市名須川町23-27

TEL (0196) 25-2323

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第198集
千手堂・羽黒山麓Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書正誤表

頁一行	誤	正
8-4	梅ノ木台地遺跡	梅ノ木台地 <u>Ⅰ</u> 遺跡
20-6	刻があり	刻 <u>み</u> があり
23-4	(大洞C2)	(大洞C <u>2</u> 式)